

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十二年六月十五日 印刷
昭和四十二年七月一日発行 (毎月一日発行)
(第二十二号)

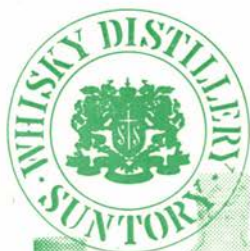


No. 22

特集・路郎百句

七月号

世界の通が懂れる……



国際銘柄

サントリー

■インペリアル・ロイヤル・オールド・角瓶・ゴールド・ホワイト・レッド

川柳塔社主催

会句忌郎路

日時 7月9日(日) 午後1時開場

会場 自安寺 電話二二一―一四七八番

市電電停前千日前下車スグわかります

★梅田駅から地下鉄でお越しの方はなんば駅下車・目標は千日デパート。

会費 百五十円

司会 西尾 葉

開会の辞 若本多久志

★才一部 救麻生路郎先生 三回忌法要 (一時半から)

挨拶 中島生々庵

★才二部 路郎忌句会 (二時から)

兼題「行末」 川村好郎選

「だしめけ」 菊沢小松園選

「枕」 北川春果選

「聖書」 麻生霞乃選

席題(三題・当日選者と題を発表。各題三句以内)

閉会の辞 松江梅里

★才三部 晩餐会 (喜楽別館)

この会費は五百円。お申し込みは二時。会場内で受けつけています。

★8月の兼題「水着」「型破り」「頭」「ゴシップ」

母の忌に母いよいよ美しき
身を慎しみ一隅照らす薄あかり
謙譲の美德とやらの黙否権
お見事な計画嘘がさりげなく
ほぐれるものほぐれピエロにされた俺

中島生々庵

今月のことば

◎五月三日は私の「母の忌」である。生前の母には一生涯苦勞のかけっぱなしであった私。詫び心で胸がばいになる日である。その日から十日程で毎年「母の日」が来る。いろいろ考えさせられる五月という月である。

◎二十年程前―羨ましくないか俺には母があり―と詠んだ私が今では一日に疎くなれそうもない母恋し―である。母を失って満十五年母の忌には深くうなだれたまま観無量寿経を聴くが「母の日」は裏家の狗のように落ちつ

かぬ。その私に赤いカーネーションは耐え難い寂しさとなって迫って来る。今年の母の日は老妻を伴い当麻寺の古曼陀羅拝観に出かけた。人出のない早朝を選んで極楽浄土の欣びの図。薄暗い灯の中に暫らく赤いカーネーションから救われて母に通ずる素朴さに浸った。◎先日朝日新聞に足立巻一氏が紹介して居られる或る四年生の女の子の「母の日」と題する詩——私のおかさんは、四年前の春のばんに死んでんだ。だまっただま死んでん

川柳塔 七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖

.....

中島生々庵.....(1)

川柳塔

.....(同人作品).....

中島生々庵選.....(4)

路郎百句

.....

麻生葭乃.....(20)

旅人路郎を蕉翁に寄せて

.....

東野大八.....(27)

明智光秀

.....(川柳戦国志・十二).....

富士野鞍馬.....(42)

秀句鑑賞

.....(前月号から).....

後藤梅志.....(40)

川柳初篇研究

.....(四十九).....

.....(18)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・

川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・

川柳と翻譯

.....

阿部佐保蘭.....(30)

盲 目 抄

高鷺 亜鈍……………(30)

無 題……………

前田 芙巳代……………(44)

ヒ ン ト 寸 言……………

鈴木 村諷子……………(45)

近 作 柳 樽……………

北川 春巢選……………(32)

雅号ぶっちゃけばなし……………

西 出 一 栄……………(61)
小林 孤呂二……………(62)

川 柳 塔 社 同 人 名 簿……………

清水 白 柳 選……………(50)

大萬川柳「戸籍」 入選発表……………

菊 沢 小 松 園……………(46)

初 步 教 室……………

★ 柳 界 展 望……………

(薰 風)……………(54)

★ 本 社 六 月 句 会……………

(庸 佑)……………(56)

★ 各 地 柳 壇……………

(文 秋)……………(59)

「足」……………

清水 一 保 選……………(48)

一 路 集 「エリート」……………

麻生 アー ト 選……………(48)

「古」 書……………

佐 野 ト 占 選……………(49)

★ 編 集 後 記……………

白 柳 ・ 三 夫……………(64)



中島生々庵選

大阪市 福井野迷路

スモツグもさつき空だよ鳩の群
春の蠅これも家族だじつと見る
脊伸びせぬ人生この世の極楽
指圧なと針なと頼めと云う科白
今日も一人死なせてあとは安眠す

岡山県 浜田久米雄

お銚子を振るから妻はめしをつき
捨てられた人形が春の川へ浮き
顔のしわ昔小町の名を残し
糟糠の妻でいまでも押し通し
年金で万事は金の世を渡り

岸和田市 内藤きさ子

病人に一票たのむ破目となり

未払いのまま春柄でよく遊び

あんまりへ神に意見を申し上げ
うれしい日鏡も歳を消してくれ
善人といわれあつかいにくい人

大阪市 正本水客

歳月の重さを見せて屋根が反り
寝転んだ視線の上にびわ湖ある
大手水鉢に沈み椿の紅おもし
散り椿散りしく下は陽のかげり
曇りのないグラスに朝の水あふれ

青森市 工藤甲吉

北国の春長靴をぬぎすてる

たんぼの丘十代が恋をする
街五月おんなはすらり鮎となる

死んでいた砂丘も生きる五月の陽
風雪の中に育つたヘソまがり

出雲市 尼 緑之助

討論会型の如くになすり合い
着飾つて教育ママの第一歩
横綱の夢横綱の胸を借り
独り居の今夜は野菜物がなし

岡山市 服部十九平

代理の祝辞にキザなアクセント
稚魚放流みんな捕られる訳でなし
春うらら養老院に流行歌
一目惚れ惚れた理由を考える

岡山市 直原七面山

氷柱の尖端で躍る太陽
浅学菲才の長い挨拶
悠久を湛えて山の池静か
靴磨いて出れば逆らうように雨

大阪市 後藤梅志

無器用な人をおしえて疲れ切り
レコードを買う趣味だったアルバイト

石山観世音にて

ようへつたもの石山の石畳

明治回顧
朗々と謠二階の灯明るし

大阪市 西森花村

すねられても百円亭主と子に言えず
保健葉ですと飲んでるコップ酒
役不足を言えば一層ビエロめき
瓦全消光いささか心細くなり

倉敷市 木村千容

老犬の養老施設あつて欲し
メーデーの列しずしずと雨の中
小雀の羽のかよわき雨つづき
つるしあげするともいえずげきれい会

名古屋 吉田水車

洋服屋どだい無理やと思えども
神様のようだと言われ出世せず
連休前団地は何を語るらん
ミニスカートいつそはだかになり給え

尼崎市 長谷川三司

兎も角も髭剃つて見た日の空虚
チンドンやを笑つてチンドン屋にもなれず
みの虫のこも安住の地にあらず
苔の庭昼三味線に酔うもよし

豊中市 戸田古方

世話ずきのベルに昼寝を起される

ゴールデンウィーク今日は焦げずに飯が炊け

呑み込んでしもて も一度リハーサル

ロングピース咳をしながらまたつける

高槻市 若柳潮花

嘘ついて逢うさみしさを男持ち

つきつめた恋へ夜露が降りはじめ

裾ぐいと上げて女の雨ゴート

吉野山静へ蔭の付けつつみ

岡山市 浜野奇童

辺地へ単身赴任 (二句)

玄関へ山の子野菜をおいて行き

一月に一度逢う瀬は恋に似る

洗濯がすんで団地は昼となり

栄養講習なる程講師はよく太り

大阪市 橘高薫風

チューリップ誠意のほどのありやし

風薫るキューピーほどの裸なし

歌うより踊るよりない平和かね

テレビ見る子をおとがいと膝に埋め

大阪市 西出一栄

新緑に酔い酒に酔いバスに酔い

特選売場ああ金持の多いこと

川がにの目玉を出したままゆだり

聴診器大分オーバだなと思ひ

明石市 家沢薺花

選挙戦今日一日の声となり

十二時を打つて時計もほつとする

ひとりごと言うて孤独をまぎらかし

配膳がすむまで男追い出され

東大阪市 久米奈良子

母の針まだたしかなる幸を着る

愛された記憶をたどる春灯下

発心の硯を洗う春の水

縁談

子の母の覚悟とならず春は近き

高槻市 傍島静馬

いつまでもきれいでいましよと云う彼女

お人よしに飼われ犬まで吠え忘れ

デパートの鏡に貧相な俺がおり

もつたいなく残して捨てて大掃除

大阪市 本多柳志

カーネーションこの里親に子が居らず

風呂上りまだ働ける腕を撫で
おみくじへ俸せすぎる手が震え
買わぬ氣をかう氣にさせる無駄話

諫草市 川岡靈眼子

かみほとけあるから地球すばらしい
臍だけが腹に遊んで成長し
伝説も生かしガイドは喋り出し
熟練工子の角帽に夢をのせ

鳥取市 森本法泉水

山口高商第二十五期生三十五年ぶりに
湯田温泉に集う(二句)

同窓会白髪四五本抜いて出る
代返をした教室がまだ残り
津山線落語のような駅ばかり
苗代田案山子は明治の姿なり

大阪市 石倉旅風

行き暮れたところが宿の独り旅
止めさせた酒飲ませたい顔を見せ
今日も降る氣の毒そうな雨の音
口先の嘘をよろこぶ暇が無し

豊中市 寺田花宵

きついこと言うて別れた友が来る

言うことが皆ほんとうの友が来る
日本の空に日本の雲があり
花見から帰つて植木に水をやり

ハワイ 築山快夢起

スピッツに髻の男がお供して
金も出来お茶かゴルフか思案する
帰化市民どちらでもよい紀元節
ミスニツポン大和撫子型で来る

倉敷市 井上旭峯

氷囊の眠りに母も誘われる
共稼ぎちよつとたまつた頃に産み
啞の子の涙を啞の子がかばい
自叙伝をきいて馳走の酒が冷え

竹原市 小島蘭幸

子沢山小さい卵を選つて買い
こけし買う心を僕も持つていた
付合ひの良さを心配してくれる
ライバルにしておりますと握手され

大阪市 不二田一三夫

挑発をしいてエツチ呼ばわりし
道連れと知らず晴れ着へ子ははしやぎ

寄席(二句)

売れつ子の弟子もつ師匠がドサ回わり

高座より司会のほうで名を知られ

大阪市 魚住満潮

バドミントン看護婦さんの鼻の孔

文無しになつて治つたノイローゼ

自 嘲

病床の視野ゼット機が通り過ぎ

下関市 国弘半休

会長の外遊談から

コカコーラだけは通訳抜きで買い

出雲路観光

恵比寿大黒喧嘩なすつたことも聴き

海ねこを訪えば別れを惜しむ声

門真市 福島鉄児

停退のあとは三猿主義に生き

夫婦善哉ほろりとさせるともあり

社長入院はや後金が噂され

京都府 大鶴喜由

よくも俺を雇う人あり有難し

人生の縮図短い花盛り

宇治近く一と月早く飲む新茶

倉敷市 本田恵二朗

長 男

博士号もろても母にだけあまえ

次 男

末つ子が大学出ても老けられず

孫

大の字ですねる抵抗法おぼえ

大阪市 山川阿茶

鯉轢画になるように風が吹き

土壇場で投手が打つて逆転し

他愛ない話で帰る癌見舞

岡山県 藤原秋月

催促へ覚えていたかとはひどい

胃袋の洗濯の気で飲むビール

汗か涙かどちらでも良いうれしい日

大阪市 木村十悟

内仕事惜しいと思ういい天気

薄く着て女がきれいに見える春

蒔いとけば育つと思うおろかさよ

宝塚市 小島無聖

切なさがせつばつまつて眼を閉じた

ゴミ箱ヘレモンのかすも香を残し

むぎむぎと轢れた蟻が生きている

倉敷市 野田素身郎

儲けだしてから友達を選び好み

喫茶店課長も雨を避けていた

アベックも釣師もねばる春の土手

竹原市 山内静水

浮き沈みご先祖様を子に聞かせ

妥協した朝さわやかな紅ののび

口しめす程度に飲んで旅ひとり

神戸市 仲 どんたく

子福者と云われ定年瘦せたまま

飲めば云う人へ飲まして聞いてやり

出張

ビュフェのビールも二百キロの揺れ

香川県 三井醉夢

丸亀お城まつり総おどり(二句)

母も子も踊る編笠五月晴れ

編笠に年をかくした気で踊り

家計簿に愛のメモありふたむかし

京都市 松川杜的

三井寺を訪う(二句)

風鐸を写す角度に春の雲

夫婦して札所廻わる幸思う

石山寺にて

源氏の間王朝の夢にしばし酔う

大阪市 金井文秋

好きなかだけ動いて祖母の生きる張り

あきらめるのにひまが要る鏡

任されて困つちやうなとうれしがり

笠岡市 木山遠二

鍬深うなつてすこうし品が出来

老夫婦欠伸やつたり貰うたり

次次に出るから末つ子のこり

愛媛県 渡辺曉童

たしかめる愛情金が足りません

泣いてすむ若さがいつそ羨まし

金でなく甲斐性がないとみてとられ

倉吉市 奥谷弘朗

ベテランと言われるだけで出世せず

前歴を知つて見直す作業服

中年のあせりを見せて小役人

熊本県 有働芳仙

葬式に行くネクタイの色を借り

日曜日金魚の墓を作らされ

妻の留守我が娘も厳しい事を云い

今治市 越智一水

貧しさをひる寝ひとときわすれさせ

貧しいが花いつばいの庭にする

健康な恋噴水とビルを背に

加賀市 那谷光郎

自慢気に納税額の不満言う

灰皿をあさり給料日が待たれ

戸がきしむ往診先で白湯が出る

岡山市 江国幽谷

午前二時頁をめくれば音があり

ピカリピカリ光つてはたる捕えられ

盆栽に凝つて土筆も鉢に植え

竹原市 杉原愛鳩

墓地だけを残して山を削りとり

絶景へ女同士は嫁のこと

ふるさとのイメージかえた屋根の色

呉市 林野甦光

オーバーなうわさ面白う聞いてやり

決論を先に話した善後策

失言を取り消す酒を酌ぎに来る

藤井寺市 西 いわを

此処と云う時に女の性を出し

痛くないバラの新芽の刺を撫で

花より団子母の日に贈る

島根県 藤井明朗

旅に来て旧知を訪えば未亡人

のめぬ酒手拍子も気が抜けて

気がねしているとは見えぬ飲みつぶり

大阪市 水谷竹莊

栗と柿土産に秋の旅終る

お世辞だと知つてて女の声にまけ

謠曲のすむまで二人かしこまり

姫路市 隠岐不酔

お角力も矢ツ張り人の子風邪をひき

なみのことなみでやるからなみの人

月末の副食物大分質がおち

善通寺市 岡田拳法

風呂を出た隣の奥さん眉がない

風切つて行つて議場で眠つてゐる

左上肺成形術(第二次)を受けて

威された程でなかった手術なり

新居浜市 安藤桂仙

一票に見えたか俺におじぎする

尻へ火がついてロケットたまらない

切りつめて行けば食えると言う不安

新居浜市 小林孝正

子には子の予算案ありアルバイト

花の雨落付いて聞く日曜日

給料の運び屋だった四十年

平田市 久家代仕男

雨垂れの遊びが好きな団地の子

冗談も語るに落ちて去に支度

生涯を稼ぐ気の無い毛糸編む

和歌山市 野村太茂津

施肥摘枝農薬消毒蜜柑花

家事の都合連休疲れとは書けず

世界一つまらぬ顔で窓口さん

大阪市 中川滋雀

慶弔の義理連休をめがけて来

スモッグに慣れて青葉がまぶしすぎ

内心はこんな土産の顔を読み

守口市 村田瓢太

銀婚を迎え写真も妻も褪せ

花散ればもとの静けさ吉野山

せわしなく二つの眼鏡使いわけ

大阪市 神谷凡九郎

茨の道にも太陽昇つて来

格気さす夫になれと妻が云い

安易なる解決 死とは悲し

大阪市 今西章雅

日本一の積りで孫の名を選び

予定終了高砂やの席追いだされ

面白い話どこまでほんとやら

奈良市 村上春巳

親類が遠くにあつて旅ができ

地方版交通事故も鹿のこと

薪能宿のゆかたも背伸びして

大阪市 宮尾あいき

女とは悲しきものよはらみ猫

いらつしやい云う身がいらつしやいと迎えられ

お土産はよもぎタンポポれんげ草

倉敷市 水粉千翁

峠道もう一と息へ夕映える

今度こそ生れ変ると負け惜しみ

娘がふたり別の好みでよく似合い

鳥取県 森田布堂

満員で食えぬ駅弁提げて降り

サービスの粗品なるほど粗品です

披露宴嫁もカツラを脱いで酌ぎ

ハワイ 羽佐間 柳葉

捨てた故郷残る未練に出る自慢

家庭平和第一条は金まわり

学歴が物を言う世の無用論

愛媛県 村上 旭童

稼ぎにも出たし畠の草も伸び

タクシーも止つてくれぬ田舎者

大阪で飯食うとこが見つからず

鳥取市 藤本 礎山

才あらば書き残したい僕の過去

だます氣とだまされる氣が来てる宿

あれも食えこれも食えとは妻の無理

笠岡市 木山 要次

一人でも喧嘩が出来る酒に酔い

値上げとは書かず改正いたします

メロドラマ不倫の果の怖ろしさ

守口市 羽原 静歩

淀競馬資金枯れた顔も見え

メモペラペラとばし講演あつけなし

霊園のムードを出して藤が咲き

鳥取県 清水 一保

朝刊が夕刊となる農繁期

人類は平和であれと鳴く雲雀

唄になるまでのビールに下戸疲れ

加賀市 木村 一路

はい息を止めてカメラへ胃のポーズ

点滴の血汐となるを信じつつ

母妻娘僕は野党化して一人

兵庫県 大江 秋月

單身赴任妻が掃除に来る日和

盃は上へ上へと流れゆく

交通戦争法律次々生んでくれ

奈良市 宮口 笛生

終発で行く出勤に雨が降り

孫末代まで継がしとうない夜を勤め

宿題を任かせて子供寝てしまい

兵庫県 遠山 可住

蝶一ツだまされて出た馬鹿陽気

三代目の養子が挙げる鯉のぼり

金の無い輩に拍手で迎えられ

大阪府 河井 庸佑

強きに弱く弱きに強いのに困り

山びこのような男で頼りなく

子には子の意見があつてまともらず

松江市 中川晃男

見る人もなくて深夜の花吹雪

ふるさとの訛大事に出稼ぎす

過去をもつ故郷に話ふれさせず

宇部市 平田実男

霊柩車の次の車は笑つて居

市場籠さんざしやべつてから走り

総入歯虫歯の痛さをなつかしみ

玉野市 小谷仙山

テルテル坊主ぬれて子供に相済まず

おい起ろ起ろと富士の朝化粧

人間を蟹が笑つて横にはい

大阪市 室谷鉄舟

葉桜になるまで雨の根性悪

百円の誠意へ今も便り来る

悪友を連れて帰つて飲み直し

大阪市 吾郷玲人

若い恋つつじの丘に咲き乱れ

鳳凰の図の包装で届く品

二十秒マッチの焰にあるいのち

下関市 桜川不水

荆妻で愚妻でなくてはならぬ妻

棒高跳び足をバンザイして越える

五臓健在夢は美し

高石市 谷沢好祐

犬ならば雑種のメスは捨てられる

何がゴールデンウィーク交替勤務なり

青春のお手々つないで街を行く

泉大津市 高津徹也

手鏡へあと五分後の待ちあわせ

懐古談今を満足していない

有望でない先輩に見込まれる

富田林市 浅川八郎

いろ褪せずはほえみのまんま小百合逝く

やがて我君と遊ばん星の影

是非善悪俗人共の世迷言

ホノルル 加川カロ女

汗だけでなし老眼鏡をそつと拭く

前借りをしてまではでに観光し

グループに二号も交せて外遊し

堺市 八木摩天郎

病めば悲し水一滴も尊けれ

潰瘍か癌かサイコロ振るここち

鳥取市 河村 日満

面会で来て借金の手を覚え

きつちり時間に目のあいた空しさ
齢だけは総理も僕も同じ年

三度目の黙礼想い出したらし

富田林市 川端 東雲 楼

岡山県 田村 藤波

種蒔いて花の咲くのを待つ心

出ざらいの性は連休もてあまし
柳友の妻から彼の訃報来る

夫婦喧嘩茶碗を破つただけで済み

いのちはかなし花見の句座へ訃報来る

岡山県 大森 娛句 楽

高槻市 山田 季 賛

新築の嬉しい窓をあけ放ち

冗談もうつかり言えぬ女事務

世を歎く明治の人が歩く会

飯場にも休みがあつた故郷帰り

東大阪市 本多 清人

大阪市 天正 千 梢

初サラリーみな新品の判で捺し

只食うだけの暮らして疲れ果て

入院のパパにも紙の鯉のぼり

功德も積まず孤独の中に老いんとす

小松市 関戸 宗太郎

松江市 岡崎 祥 月

赤チンをたつぷり塗つて医者を待ち

甲乙をつける子供の持つ頭脳

美術商が次期国宝を買いあさり

しやんとせと腰を伸ばしてペタル踏む

兵庫県 河原 みのる

岡山県 横山 一 声

手袋を脱いで蕨は採るばかり

ワックスの艶が明治の氣にいらず

蝶一羽あないする氣か先にたち

行楽の春へ忙しい切符切り

伊丹市 小川 静観 堂

京都市 都倉 求 女

啓蟄だぞと誘いあわせて出てしまひ

アンテナの隙間に遠慮して鯉のぼり

貸衣裳みたいに仲人たのまれる

たまさかの緑地は犬の糞ばかり

堺市 高崎 雄 声

芦屋市 丸川 初 甫

説法のポーズで千年立つ仏

叩いてはならぬ木魚のほこり

奈良県 西辻竹青

禁酒は宅でなさいとついで呉れ

すきな妓へ未練の二次会またつくり

米子市 石坂新雪

阿呆らしいつらがまえとは平社員

車窓から水の豊富をみて帰り

岡山県 池田古心

雨戸さえ錠さえいらぬ家で老い

よろめいてみたい心の燃え立たず

美禰市 安平次弘道

助からぬ命退院さすときめ

勇み足叱らずやる気はめておき

笠岡市 出原真奇

妻は留守プロパン途中で切れちまい

隣より一匹多い鯉のぼり

小松市 馬場魚山

菜の花が咲いて蝶々が見当らす

沢あんの真ん中選ぶ総入歯

笠岡市 松本忠三

履歴書を社長タイプに打たせて居

修正をして写真屋がゴマをすり

福井市 大山雅城

花嫁を一目見ようと背のびする

出来上ったとき催促がやつて来た

八代市 永松道雄

潮風にもまれて育つ岩の松

荒海を越えて来たのに渡り鳥

福岡県 太田湖平

砂利と砂運ぶばかりで土建業

米倉をガレージにして髭もおき

岸和田市 葛城伊三郎

夏近し祖母もののこの動き出し

苗代へ父は権兵衛の型で蒔き

加賀市 細呂木魯木

捕えたねずみへの憎しみよく肥えている

時計のような男の定年町の世話が待ち

泉佐野市 大工陸夫

産の世話孫見に来いに引つかかり

雑念も去つて夫婦で齡をとり

枚方市 宮川珠笑

家計簿に生むな生むなとささやかれ

中絶をした夜無口で食う二人

和歌山市 二越俊爾

金たまる程に物価が騰つて来

お百度も四人で踏めば二十五度

和歌山市 西尾公作

貧乏を作文にして賞を受け

昼下りホステス別な顔で起き

和歌山市 土谷城石

向い合う両横綱の大胡坐

祭より今日の天気を誰もほめ

大阪市 賀本昇

金貯めて男なんか用はなし

御声援感謝しますと一人決め

富田林市 岩田美代

嘘ついた口をきれいにうがいする

添書の名刺にすぎる控室

尼崎市 岡本昭三

百円亭主に冒険などできず

復職の履歴中退をわるびれず

大阪市 西川誓二

どことなく娘の仕ぐさ妻に見え

ニンマリと嘘の囁き真に受ける

熊本市 楠田英子

悪友のよき父さんはほめてくれ

その位は飲めますのよと言つてみる

新居浜市 近藤凡生

四十坂のぼり詰め過去よサヨナラ

ハイヒール朝の舗道の早春譜

松江市 柳楽鶴丸

間違いを素直に認めるいい女房

社長の無理に困る困る困る

大阪市 宮地双楽

伝説を手繰り大和へ足を入れ

駅弁のつり貫い過ぎ汽車はなれ

出雲市 原独仙

共学の別れへ泣いて師へ泣けず

我が貯金出すのに押捺手が震え

大阪市 福井多蘭子

新幹線村は栄えぬまま残り

ストリップをお膳に添えて繁盛し

岸和田市 上林加仙

一日を笑いで暮す四月馬鹿

砂文字の恋を掻き消す夏の海

京都府 清水谷句楽坊

人世の夢見つくして破寺に

臉を閉じて過去ふりかえる霧の庵

★

清水白柳

意気込みへ聞くだけと言ういい度胸

銀行のネオンが見える高架線

同性の目を意識して恋終る

雨毎に土地が流れる造成地

いつまで続く噴水の高低よ

川村好郎

半数の権利女史はまだ喋り

招待状出しましたがととほけとき

孫と駈ける素足へ渚弾みあり

陽を深く吸うた布団も春なれや

床柱銀行遠慮なく坐り

北川春巢

妻の入院つづく

ゴールデンウィーク病院見舞とは暗し

回復期退屈な頃見舞い来ず

病い抜けされまっしやろと励まされ

妻不在卵ゆでたらみんな割れ

サビ抜きを通して楽しそうな父

西尾 栗

大家なり難解の句なりこまるなり

卑怯なり旅行吟で茶を濁し

バストヒップ中年の眼のやりどころ

近頃のスケールを女将かこつなり

到来のさざえで仲がなおりかけ

若本多久志

母の日に想う

母の日のなかつた頃に母は逝き

ゴールデンウィークとやら山で死に

すき腹へ詰めても年寄りらしいめし

操縦をするつもりがされており

大丈夫と思うお齡へ信じ切り

菊沢小松園

顔の皺ころのしわに気が附かず

書きつぶしの利かぬ人生たそがれる

歩時計を気にするほどの齢になり

肩抱いて花火みてたも二た昔

取り柄のない女に物好き引つかかり

松江梅里

保津峽にて

二丁櫓で下る手練の竿さばき

目に青葉肌にしぶきのかかる景

明治百年この還暦に湧く斗志

奏楽をテープで流す華燭の典

紹介をしるよとつづきい縹緞

川傍柳 初篇研究

(四十九)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 高須唾三味
清博美 丸十府
藤井和雄 岡田甫

413 ろくろ斗をおんらしくして遣り

梅 斧

岡崎「斗」はバカリと読む。ほとんどろくろと骨ばかりの破れ傘を、俄か雨に親切めかしに貸してやる。「骨がいるぞへと傘かしてやり」(傍一・23)という場合。その借りた方は「つらあてにろくろと棒を返す也」(宮一・41)ということになる。清「ろくろばかり」だから骨も相当折れている。

藤井「満足なのはろくろばかりの破傘を恩がましく貸す亭主、借り手もあきらめて借りて行く俄か雨。」

川端「感謝して返すべきを「傘ばかり返しなさいと女房いひ」(傍一・27)となつてしもう。交際とはむずかしいものである

高須「「恩らしく」という言い方がちょっと面白い。ろくろばかりというのは、そ

れほどの破れ傘ということ、ともかくも「傘らしいもの」を貸してやったのである。丸「贊。「恩らしく」の拝借の場が見える。

岡田「贊。

414 笑われる顔落たかへく

一 甫

岡崎「羽根つきでつきそこなつて塗られた顔のスミをぬぐっている。鏡がないので相手に聞き聞き——。

清「結立の髪に晴着を着ていたのか「なりふりにかまけ追羽子娘まけ」(七三・11)となりスミをぬられる率も多くなる正月のにぎやかさが感じられる句。「追羽子に負けて背中の中の数しれず」(拾一・12)という句もある。

藤井「羽根つき終った後のにぎやかさ。

高須「「落ちたかへく」と聞いているのは顔に墨を塗られた当人、羽根つきの後ば

かりでなく、昼寝から起きて笑われた顔に人に頼んで拭いて貰っていたのだが、拭いてくれる人が信用できず「キレイにみんな落としてくれたか」と念を押しているのである。

丸・岡田「高須説に賛。

415 袖口を買って隣酒を出し

同

岡崎「呉服店の店頭風景。わずかな袖口を買うしがない女客のある傍では、酒肴で接待されている大口の注文客もある。越後屋では十両以上のお客ともなれば酒肴付で饗応された。

清「しかも奥座敷に案内して主人が挨拶に出る。「さゝやいでやるは飲ませる呉服店」(七六・13)「呉服屋の飯安全で食へぬ也」(七・5) 現在では想像のつかない差別待遇。

藤井「昔は婚礼衣装一式求めると、御馳

走が出た。

高須「袖口を買ってトナリ」だから奥座敷とまではゆかず、番頭が「ちよとお茶がわりに」と酒を出しているのであらう。袖口という言い方が見つけどころ。

丸「礎稿賛。そういう呉服屋もあったのであらう。」

岡田「礎稿の十両以上はいかが。一両以上も買えば、膳を出したらしい。ただその額によって二の膳、三の膳と豪華になった46 今の事をきめなんしと袖をぶち

清「遊女が客に何かを無心して、その返事を催促している図。いずれ金のかかることだから客の返事もしづりがちである。この句「袖をぶち」とあるから、振袖新造と老人客を詠んだものか? 「まあうんと云いなんしよとつめり上げ」(一七・四〇)

藤井「金のかかる事だから紋日のたのみだろう。紋日に馴染客の多いほど見得になるしはがきく。袖をぶちを振袖新造と限定せず、三分の上妓と解すべきだろう。その方が並々ならぬ出費に困った客の波面が強く浮き出る。故に袖をぶちは単なる女郎の痴態と思う。」

高須「これは大したものゝをネダられてゐるのではない。今の事をきめなんしと軽く云っているから、新造か禿の甘台か何かの無心とみたい。それで袖をぶちが利いてく。オイランの無心なら袖をぶちぐらいで

はすまぬだろう。内股をつめられるところだろう。「禿を袖にぶらさげてにげるなり」(二二・39)

前田「姉分の上妓が妹分の振袖新造に「今のこと(遊客に対しての約束ごとか)きめなんし」とせつかんしているものと見る。でないと「ぶち」の意が通らない。」

丸「きめなんし」の親しく「袖をぶち」の嬌態から高須説の如く解す。

岡田「賛。何か軽い約束ごとである。47 酒にする所。か馬に蹴たおされ 眠狐

清「何かの故事を詠んだ句かとも考えるが不明。」

藤井「放れ馬の風景。よし俺が一つ暴れ馬を制止して男をあげ、一杯酒にありついでやろうとよせばよいのに大手をひろげて放れ馬を制しにばかり、却って馬に蹴たおされた。」

川端「馬には種々の意があるが、ここでは丙午の女を指しているのではないかと思う。この年に生まれた女は亭主を喰ひ殺すといわれ、嫁入口がなかったので年をかくしたりしていた。または、酒の肴にひやかそうとした踊り子が気が荒く、逆にこてんこてんにやり込められた。駄労解。」

高須「藤井説同様、柳雨翁も「馬泥棒を引っ捕えんと追いかけて、鎧袖一触蹴とはされた」と駄労解していられるが、何か故事がありそうな気がする。」

前田「藤井・高須説に一応賛。しかし

「馬に酒酔がさめると手におへず」(傍二3)「質屋から丸腰で出て馬に酒」(一三八・38)があり、くせの悪い馬に酒をのませようとしたところ馬に蹴たおされたと解す。馬に酒をのませることは珍らしくなくて、草競馬など使い手のいうことを聞かない馬に、酒やビール等を飲ませることはよく知られている。

岡崎「放れ馬に賛。故事でなくても市井にみかけそうな情景。」

丸「放れ馬ではないかと疑っているが明解を得ず放れ馬と解している。前田氏引用の後句は付け馬である。」

岡田「やはり、?。放れ馬を取り押えても酒にありつくとはどうか。それなら、むしろ人がなかなか乗りこなされぬ荒馬を、よし俺が一番手柄をたて、殿の玉盃を得ようとのり出て失敗……と解した方がいいかも知れぬ。だが、まだこの解も落付かぬ。?としておく。」

前田「武玉川からこんな句が見つかった。「酒屋もまじる馬の煩ひ」(一四)

路郎川柳手拭い

子沢山

僕のまくらは

何処へいた

送料共 百二十五円

路郎百句

第二回「路郎百句」を「旅人」からぬきました。一字一字原本とてらし合わせましたが、仮名づかいは原本どおりにいたしました。

カットも
麻 生 葭 乃



梅田昭和ビル時代の路郎
葭乃両先生（昭和十七年頃）

二階を降りてどこへ行く身ぞ
お元日坐るところへ坐らされ
今日も店にゆきたるのみ机のほこり
もう叱るばかりの宅とって居
歯が痛いさうかと亭主出てしま
お前達は畳の上の資本論
嘘をまろめて書齊けうとし
日あたりのいいうちだが物足りなさに変りない



独身時代の路郎先生
(年代不詳)

戯れに ついても 淋し 鐘の 巾
 売る 土地があつて 老人折れて 出ず
 寒う おまん なゝと 芸者も 年を とり
 人間に して やろと 云ふ 嘘をつ く
 撞球^{たま}よ ころべ ころを 吸うて ころび ゆけ
 暴力は よし キリストも 殺される
 会社では 横顔 だけが見える 位置
 大杉を 殺し 思想を 取り 逃がし
 時計に まで うつつる 神経 衰弱 症
 そろばんの 三桁 四桁の 人生 か
 裸の外に うらやまれる ものを 持たず
 ああ 日向 五尺の 影と 知るも 憂し
 拝まれて 女は 泊る 気にも なり
 逢ひた かった 逢ひた かったと 裾を ふみ
 真似 したり して いる うちに 少し 惚れ
 ネオンの 下を 妬きつ 妬かれ つの し 歩き



鳴尾時代の路郎先生
(大正十二年五月)

老らくの恋の濃度のてれくさく
未だ慾あり水晶の珠数
雨風が逢いたいころつのらせる
さあみんな降りててくれとお父さん
ポーナスで父の腕前疑うな

ロンドンの一周忌に(二句)

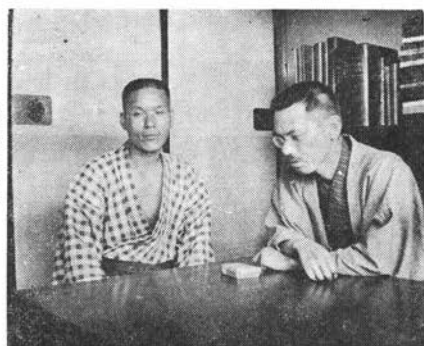
お父さんはやはり川柳々と云ってるよ
お父さんの神経衰弱がわかるかい
わがままを父特権と思ひいず
風あがりきって親子が口をきき
子が出来て傘の迎へが来なくなり
笑はぬ父に恩給がつき
ひとりひとり雑誌をあたへ冬を越そ
髪結はぬこともしまつの数に入れ
子を泳がせて沖の景色は眼に入らず
まだ弟があるやうにいふ悔み聞き



前列右から福田山雨楼、村田周魚（三人目）塚越迷亭、井上信子、麻生路郎、藤島茶六、左端が西島〇丸。
後列右から三人目が高須唾三味五人目が川上三太郎、前田雀郎左端が三浦太郎丸諸氏。
（昭和十一年九月十九日）

ロンドンを憶ふ（一句）

被^き人のない帽子があるに気がつまり
 數^{かず}医者といふて居るとは子から聞き
 どもの児にみんな云はさぬ親心
 P T A に出るを社交と思う母
 父の咳^{せき}節約^{せつやく}をせよと云う如し
 名ばかりの夫婦と知らぬ公益社
 嫁にやった娘^{むすめ}は娘^{むすめ}で困る大三十日
 伊達巻の汚^{きた}れ年子が二三人
 十日戎両手でうける気で出かけ
 無^なくなると知ってもさらの傘を貸し
 相住居米がどちらもきれている
 腰^{こし}が立てばまだ富田屋の一の客
 斜陽族墓地の引越^{ひきこ}しにも困り
 附録^{ふろく}だけでエエと編輯侮辱^{ごうぶ}され
 すしだけであんなにしゃべる妻の客



向つて右は

麻生路郎先生

木村半文銭氏

(大正九年・春)

組見の中の一人が嫁き遅れ
うすぐもり誰か来そうで来ぬ日なり
遺髪が戻り遺骨が戻り本人が戻る
鹹になった人の名刺がメモにされ
西部戦線わが童貞に異状なし
銀行のお世辞も気の腐るものの一つ
幸福は金庫の中になかりけり
颱風のあんな力が欲しくなり
正月も昔は紫雲たなびいた
金持だ胃癌だいつの間にか死に
院長をもみくちやにする芸者が居
帰れとは死ねといふことにもあたり

啄木祭に

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし
男ばかりで虫のいい話かな
しらじらしき悔みの淀まず



向って右は

亀井花童子氏
麻生路郎先生

(年代不詳)

水溜り飛びそこねても一人かな
飲みに来いと云い云い春を留守にする
君の顔で僕の顔でと呑みにゆく
箸紙を書いた手でもう父は呑み
嬉曳の影と大根を干した影
かんにんしてとキッス両手でふせがれる
恋人が来ているらしい茶の間なり

三本松村にて

脱穀機ドドドドッと日が落ちる
忘れてくれと社長は金ですむつもり
同窓もあちらは芦屋に住む身分
ヤミ出来ぬ亭主は今日も毒づかれ
ジリ貧に今更家の広いこと
ふるさとは蝗右から左から
売食ひが今日は歌舞伎へ行ったそな
疎開の子繩の帯するまでに慣れ



昭和十三年・北支蒙疆へ
旅をされたころ？

シャツよりも肉肉よりも米のこと
 一万や二万長屋の端で食い
 配給をさへも流して生きんとす
 お見外れをされて戦闘帽を脱ぎ
 黼へる袖はなくとも美しし
 軍属の自信講道館五段
 戦術にしては断食すねたよう
 さすが銃後桜は咲いただけですみ
 千人針胡瓜抱へた手でも縫い
 残置灯女給馳のやうに消え
 アルミニウムかアハハと戎さん笑い
 買溜めに嫁の里まで手を廻はし
 藤の棚女中は親に会ふところ
 人形になつてゐろとは嫁へ無理
 資本家のための筆とはなり終り
 うれしさに盲は一つ踏みはづし

早いものだ。もう二度目の路郎忌がきた。私の書斎には、いつも路郎著の「旅人」がある。気がむくとよく掌にのせてみる。すると、その重味の底から声がする。

「先生、これ、大きさといひ、厚味といひ装ていといひ、全くいうことなしですな」

「そうか、苦勞したんやで、これには……」心からうれしそうなその声と、その老顔。ごくりと私のどの仏が動く。「旅人」は路郎

旅人路郎を蕉翁に寄せて

東 野 大 八

江戸、伊賀、上方から往還幾度、その草鞋の跡は奥州から長崎におよぶボヘミアン芭蕉―彼自身孤独にして偉大なる旅人であつたわけだが、彼は杜甫の詩に傾倒した半面、莊周の説にも心寄せていたことはつぎの章でも明らかだ。

「南華老仙のただ利害を破却し、老君を忘れて、閑ならむこそ、老の楽しみというべから。人來れば無用の弁あり。出でては他の家

先生の快心の句集刊行物なのだ。
「旅人」は、いうまでもなく芭蕉からの反照だ。かつて川維に「芭蕉ざれ言」を書いた

ことだが、芭蕉の旅人のことには敢えて触れなかった。旅人は芭蕉に限らず、もはや路郎そのものでもあるからだ。

だが、路郎の「旅人」のイメージは、越し方の柳道一筋の、この人の生涯から私にはいつも芭蕉がどこか漂白されてくる。

業をさまたぐるも憂し。友なきを友とし、貧を富として五十年の頭夫、自書して自ら禁戒となす」

南華老仙すなはち莊周は、紀元前の中国戦国時代、窮民の子として生れた、実存主義の偉大なる先覚者だ。「莊子」知北遊篇に言う

「美しき自然の眺めよ、悦ばしき狩獵の遊びよ。われ欣欣然として樂しましむるか。樂しみ未だおわらざるに哀しみまたこれに繼

ぐ。哀樂の来るやふせぐあたわず、その去るや止むるあたわず、悲しいかな、世人はただこれをものの逆旅とやいわん」

飲樂の後の悲哀、喜怒哀樂の波濤におしこまれる人間の現実、感情の去來を送り迎えるさまは、まるで旅館のようなものだ。莊子は人間の一生なんてものは、グランドホテルの玄関で動く回転ドアを見る如し、ともいつてるわけだ、現代ではサルトルの実現主義に似通っている。現代ヨーロッパの苦悶を、サルトルは神を見失った人間の実存とは？の哲問を自分ひとりの存在で選ばなければならぬ」と。だが、莊子はせせら笑ってこう切りかえている。人間には神仏なんてもんは、はじめからないんだ！

私の父は、極富と極貧を往來したが、その裏打ちは酒色であつた。私が九歳の折、倒産して執達吏が三人もやつてきた。貼紙だらけにされた家の中で、落日を真向から浴びて父はいった。さあ、何もありませんが口汚しに一つ。ぜいたくな酒席がそこにあつた。三人は大いに恐縮したが、あとで父は母の詰問に答えて言つた。

「なにあに、奴等にはない、おれの最後のおれへの振舞酒だ」

莊子かぶれと酒友にいわれたこの父の子の私は、「ホトケほつとけ、神かまうな」の教

理を両親から受けて育った。だから戦場で左腕を粉碎して、いよいよあの世行きとなった際、私は試みに念仏を暇にまかせて唱えてみたが、しばらくするとゲラゲラ笑い出している自分に気がついた。神仏にとつて無縁の衆生だった自分が、なぜ空々しく経文を読むのか、という自嘲だった。

路郎先生との酒の席で、私はこの話をしたことだが、先生はひどく熱心に耳を傾けていられた。そして例の人間孤独説が芭蕉とともに現れた。(川雄最終刊号参照)

芭蕉の東依西托の旅は、身を責める孤独からのいわば逃避でもあったらう。

「かく言えばとて、ひたふるに閑寂を好み山野に跡をかくさんことにあらず。——つらつら年月の移りにし拙き身のトガをおもひに、あるときは仕官懸命の地をうらやみ、一度は仏裡祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身を責め、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりとさえなれば、ついに無能無才にして、この一筋につながる」(幻住庵記)

芭蕉の悟道は、この立命の一節に明らかで私はこの章を眼にするたびに、柳界一途にその身を投入した先生の過去と現実をよく脳裡に思い浮べるのである。

一日三千句を作るのを自慢にして号も三千風とした人が、長崎での話。

「今江戸に芭蕉桃青という俳諧の上手あり。

ラチ明かぬ俳諧にて、発句一句作りては四、五日も七日もその句を案じ、漸く一句を成就す」(芭蕉談後記)

一日二万三千句を誇った西鶴と同世代に生きた彼は、大量生産の巷間の騒がしさを横に「両句三年得 一吟双涙流」の苦吟をしていたのである。

彼の辞世の句は「旅に病んで夢は枯野をかげめぐる」だが、支考を呼んで「なおかけめぐる夢心」が別にあるが、どちらがよいかときかれない。だが支考は、あとの句の上五がありません、といったが、そのままになった。

「いかなる不思議の五文字か待らん。今はかいなし。みずから申されけるは、はた生死の転変を、前におきながら、発句すべき業にあらねど、よのつねこの道に心こめて、年も半百に過たれば、いねては朝雲暮煙の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。これ仏の妄執といましめ給える。ただちに今の身に待るなり。このちはただ生前の俳諧を忘れむとのみ、おもふはと、かえすがえすくやみ申されしなり」(笈日記)

以上は芭蕉が死の四日前(十月八日)のこととて、その翌すなはち臨終三日前には

「このこと去来にもきけるが、嵯峨にて待る大井川の発句、覚えけるかときかれしを

——大井川浪に塵なし夏の月と吟じければ、その句園女が白菊の座(白菊

の目にたてて見る塵もなし)にまぎらわし、これもなき跡の妄執とおもは、とて

——清滝や波にちり込む青松葉 (同上)

と改めたのだが推敲まさに死のそのセツナまでである。

句を作ること一句もなおざりにすることなき、芭蕉の面目について、元気なころの話。

「いずれの年にてありけん、むつかしく面白き前句出で、蕉翁深く案じ入り給い、程経りけるを、ふと爪にものをかきけるを、翁見給いて文台を下りよとの給い、気色いと悲しかりしよし」(老の案)

句作の厳しさ、眼にみえるようで「生命ある句」に生涯をかけた芭蕉の趣貌は、そのまま路郎の面目を伝えもしている。

また、こうしたエピソードの一つに、磐城平の殿様が俳句が好きで、招かれて芭蕉は其角を伴っていった。ところが殿様は大のタバコざい。タバコ好きの芭蕉はそのため、終始、一服も点じなかった。江戸っ子の其角はそんな師匠が気に入らず、あとでへつらいに近い様は気に食いません、あとでへつらいに芭蕉はその小心得をつよくさとして

「俳諧は小技といえどその道や大、風流の中にも礼法を忘れてはならぬ。法を破るを洒落とするは傑紬の徒にして、繁を省くを風流とするは頑愚の徒だ。公の前で禁煙せしはへつらいでなく礼である」(俳諧世説)

其角大いに叱られ、恐れ入ったらしい。

——古くとも僕には仁義礼智信

の路郎先生の句材をみるようである。私は芭蕉を風騷の詩人と書いたことがある。だが、俳諧のこの放浪の大詩人は、旅によって俳諧の心眼を開き、流離の最中に安心立命して、天地と同化するほどの詩魂に徹した。其角はこう書いている。

「そもそもこの翁孤独貧窮にして、徳を高めるにつとめること無量なり。二十余人の門葉辺遠ひとつに合信する。因と縁との不可思議にわかに勘破し難し」

しかし、キリストや孔子にも裏切者の弟子が出たように、芭蕉にもそれがある。その代表が路通だ。乞食をしていたのを拾いあげた芭蕉だが、俳諧の道を心得るや、第二の西行を気負って背をむけて去った。この背かれた師匠は門下の曲翠にあてて書いている。

「その志三年前より見え来る事に候間、愕く、ことに足らず候。常の人が常の事を成すに何んの不審が御座あるべくや、拙者においては文通仕間敷候、俗に成候ても、なりとも風雅のたすけに成り候わん、むかしの乞食よりまさり候べく」

だが、臨終の芭蕉は決して路通を忘れてはいなかった。未来を枕辺に招いて

「路通が数年の薪水の労、ゆめ忘れおかずわれなきあとはおよそ見すてたまわず、風流

交り給え、このことたのみ置はべる」(花屋日記)

人間は、つねに自由を口にはするが不自由だらけの死刑囚にはかならない。勝手にこの世にほうり出されて、苦勞しぬいて死ぬという。貧富美醜の環境でも、人生は拘束だらけで、決して羽根を伸ばせる浮世ではない。芭蕉は、それを独りで生きて、この人なりの自ままのうちに死んだ。しかし路郎先生は、妻子を持たれている。

賢者黔婁(けんる)を神サマのように崇敬していた曾子が、その死をきき訪れてみて仰天した。掘立小屋の中に、まぐらは瓦、しとねはわら、掛ぶとんがないので、ふだん着の薄いのがかけてあるだけ。ところでそのきものはたけが短いので、足をおおうと顔が出るし、顔を包めば足が出る。みかねて曾子がかたわらの奥さんにおずおずと声をかけた。

「どうでしょうか奥さま、きものをナナメにしたら、どうやら顔も手もふさがりましますに……」

ところが奥さんの答えがふるつている。

「うちの先生、ななめでなかったからこんな生涯を送ってしまったのです。生きている間ナナメでなかったのですから、死んだからといってナナメにしたのではホトケの主人の志にそむくことになります。本人もそのつもりで死んだのですから、このままでこそ成仏

すると思います」

曾子はこのけんる先生の伝記に記している。

「ななめにして余らんよりは、しかし正しくしてたらざらんには」と。

失礼ながら、私はこの章を眼にして、即座に路郎夫人の葭乃先生を思い浮かべた。たけの短いふだん着をマトモに着せんがための、柳人路郎と川維の切り盛り、路郎の死と川維の即時終刊、多感多情な詩人路郎は、生前すでにその奥さまのレジスタンスを明察していることである。先生にかわって芭蕉はこう記している。

「予が風雅は夏炉冬扇のごとし、衆にさかひて用いるところなし」

その通りでござんすよ、葭乃先生は莞爾と夫君へのあたたかみをこめてかくうちうなづかれることであらう。

「ナナメにして余らんよりは、しかし正しくして足らざらんには」川柳一家の麻生家の、それは厨の、世の常のことであつたらしいのである。失礼不遜の私にかわって、最後に蕉翁もニコニコされてこうくり返して下さった。

——もろもろの心柳に托すべし

この句は、私にすれば路郎ご夫妻への讃歌とも感じとっている。

Rses of the shortest type)

May umi Hara

人間が創まる或る日林檎食い

川上三太郎

The man, on a certain day
Of the Creation, happened
To devour an apple.

By Santaro kawakami

昔々金の鷲など放し飼い

川上三太郎

Once upon a time,
Golden kite was among
Those birds ranging freely.

By Santaro Kawakami

轢き逃げへただ炎天と雲一つ

川上三太郎

Disappeared has the hit-and-run car, leaving
Behind it vacant airs of the scorching
Sun and a floating cloud in the heaven.

By Santaro kawakami

すばらしく儲けた夢へ蚊が止り

阿部佐保蘭

A mosquito has settled on
The dream in which the sleeper
Has Just made an immense profit.

By Saboran Abe

越し方を考えてゐる花吹雪

阿部佐保蘭

Amongst cherry-blossoms falling nigh
In the wind, standing here am I
Thinking of the days gone by.

By Saboran Abe

床屋から惚れられそうに一人出る

阿部佐保蘭

Out of a barber,s comes a man, styling himself
As if he were handsome enough
As to make any female forget herself.

By Saboran Abe

盲目抄

高鷲亜鈍

STICKをスベルでよめば、スティックだ。日本語よみにすればステッキ。杖の事である。ホッケー競技で球を打つ棒はそのままスティックと呼んで、ステッキ(杖)と区別しているが、この日本語化されたステッキとわれわれが普通用いる杖と概念を少し違えているようである。

目明きであつた私の過去に特にステッキに凝つたという程の事はなかったが、それでも色々二十本ぐらいのステッキを手がけたが、いつのまにか他所で忘れたり、盗られたりして、一、二本残っている奴は先がとんでしまつて大掃除の畳叩き用に置いておくぐらいであつた。障子の棧や畳の目が辛じて見えていた一昨年の夏、一人歩きが不自由になつた頃、大掃除用にしまつてあつたステッキをひっぱりだして、使うようになった。

○
ひとの食うもの耳と口とでひがんでい
正視者とハンデイツけず勝負せん

Senryu (Witty Japanese Verse)
Translated by

夕ざくらとんぼがへりがしてみたし 麻生 路郎

Seeing cherries in bloom in the dim light
Of hand-lamp, stimulated am I, by an irresistible
Impulse, to turn somersault with all my might. By Jiro Asoo

古くとも僕には仁義礼智信 麻生 路郎

Old-fashioned though I am, I in reality
Stick to the five cardinals: benevolence,
Justice, politeness, wisdom and fidelity. By Jiro Asoo

雲の峯といふ手もありさらばさらばです 麻生 路郎

Would that I took another dreamy step to stay
On a gigantic column of cloud, when I pass away;
Farewell, Oh my friends dear, farewell! By Jiro Asoo

うき草は浮き草なりの花が咲き 中島生々庵

An insignificant duckweed as I am,
I can still be with small, lovely flowers
In bloom, becoming to a floating weed. By Seiseian Nakajima

気ままとも愚痴ともつかず老夫婦 中島生々庵

Years have passed in such
A cross between waywardness
And grumbling-we old couple. By Seiseian Nakajima

老骨に粉骨砕身とはきびし 中島生々庵

Life is so severe to us, too,
Urging us old bones to
Exert ourselves to the utmost. By Seiseian Nakajima

直原玉青著

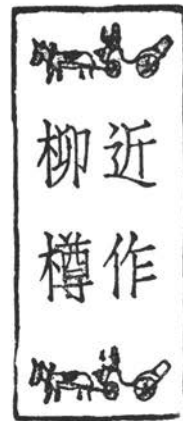
「新しい南画と

俳画の描き方」

創元社出版
二千元版

本社でも取次ぎいたします。

物も言わずに隣犬訪れる
窓開けて空をめぐけて双手つき
真夏の陽カッと額に照りつける
ころやすだてらに頼めば断られ
生く事で迷惑かけてよいものか
ベトナムの和平に頭痛くなり
生きてても死しても天のふところ
無から有 有は無になるわが眸
ある場所に無い場所にあるからうろたえる
この上は愛しつづけるだけでよし
茄子漬指でつまんでじかに食い
長流にとり残された石一つ
犬が吠えてる猫が泣いてる外にきく
今にして笑えぬ猫にかん袋
寝て食って着せられ云う事ないけれど
曲芸も手品も今は持ちくされ
額を破って柱の所在しかと知り
雄はよし羽をこすって泣けるから



北川春巢選

竹原市 三宅 不朽

眼の底に泉湧きくる柿若葉

白紙疑視喜怒哀楽の無尽蔵

信心の太鼓の音にも春夏秋冬

雨三日その日暮しをかきまわし

ニツコリとみなまで聞かぬいいニュース

広島県 高橋 鬼焼

灯を消してマダム自分の酒をつけ

回復の胃をたしかめる酒の味

鍵かけたように新妻無口なり

ニュースだけ見たいテレビへ足袋をぬぐ

妻のぐちすなおにきけば金がいり

大和郡山市 中内 孚彦

友達と来た強みエロ本読んで去ぬ

保母先生寝せつけといてパフたたく

お互いの瞳を覗いてたプロポーズ

乙女の笑い水爆が消していった

大阪府 井上 美恵子

金貸して上げたたらえらいほめてくれ

親切になつた他人の下心

出世せぬ人で話がよくわかり

世渡りの才能があり友がなし

岡山県 瀬戸山 文平

凡人の愛は一本道で行く

腹へつたときの育ちがすぐわかり

街で売るオタマジヤクシの値にあきれ

芽ぶくもの自然に添うた色を出し

仙台市 平野 光道

夫婦けんかをとめてお金を借りられる

ホステスに聞けば美しい過去もち

清貧と誇っているのにさげすまれ

血のしたたるピフテキ食べつつ平和論

愛知県 榎

紫 光

故障したテレビのおかげ早寝する
長の名はついても部下はただひとり
職の世話すれば保証も頼みに来

少年の濡れた新聞とがめまい

鳥取県 鈴木 村 諷 子

耳遠いこともこの家の世襲にて
福耳の自信たがわず貯つて来

腹芸の出来ぬ男で見込まれる

のらりくらり両方に票読まれ

松原市 谷 垣 史 好

アイラインうつろ埴輪の目の如し

春愁の日がな一日口を開かず

春おぼろ物問いたげなつけまつげ

健保法改正・薬代一部負担

はかない抵抗薬を貯めておこ

京都市 大久保 和三郎

春深しマツチの軸で耳を掘る

受話器もつ片手で億の判をつく

控室へ女を脱いでバスケット

死ぬまでのいのちぞ酒よついでこい

大阪市 和田 痴 亭

豊満な水着が生える浜の砂

八百萬ろずガレージへも祭る神
少うしは言葉を濁す過去があり
遺さずに死後の平和を希うとし

広島市 上 代 美 文

バイパスの出来る噂の田を作る
酔つたのが一升びんを提げ歩き

親の轍踏まさぬ覚悟親が決め

道義的責任違法でないと云う

大阪市 西 本 保 夫

子会社へ代つてもやつぱり平社員

学卒を助け字引きの平社員

古ぼけた机に済まぬ平社員

オールドミスまでもがナメる平社員

米子市 林 瑞 枝

恋捨てた人生仕事に命かけ

病床の大名暮らしに少し飽き

母に効く薬草野辺を馳け回り

娘の理論母の意見を上回り

仙台市 川 村 映 輝

発表の前夜になつて眠られず

ゴールデンウィークあくびをまき散らし

金が無いから無欲と感違い

ジェット機でテレビで流行運ばれる

西宮市 佐伯 仙葉才

猫背だが日本一を目指して

街灯に大根足が白すぎる

キスよけの髭にもまして野心伸ぶ

苦勞人の笑いに共に笑いえず

羽咋市 三宅 ろ亭

定額を預けば農協空に連れ

自主性がなくて妥協の人となり

管理職抑えるツボを知っており

耕耘機睦まじいとこ見せて行き

尼崎市 中谷 利美

大串で酔つて半助包ませる

太りたい瘦せたい人間エゴイスト

座布団を二つに折つて念を押し

飲むだけの芸さへ医者に法度され

尼崎市 中溪 慶彦

花見する酒とはみえぬデツカンショ

プランもう一泊二日の種が切れ

旅みやげ食えた魚と飲けた酒

ど忘れはもう妻だけのものではし

東京都 杉生 純子

窓ガラス画面の変る面白さ

サボテンの長生き人の手をかりて

画をかいているつもりしばし屋上に立つ

計算もしています生きています

大阪市 古川 静波

棒だけの眼鏡をかけて人を欺く

手折られしより白バラの不潔感

退院をしたら四十に手がとどき

青葉道故郷は捨てるとこでなし

大阪市 小谷 葉子

事務服がきのうの私を取りもどす

懺悔するでなく讚美歌の人となり

童心にかえる砂丘の足の裏

カーテンの色替え寂寥からのがれ

桜井市 岩本 雀踊子

鼻にぬける智恵をとにかく云う他人

母ちゃんにへそくりがある夏祭

市場籠ついでに廻る葉びん

島根県 小砂 白汀

山ぶきの蕾は頼りなげに咲き

五月晴吸えば生きてる鯉となり

五月晴れ瞳きれいな女と座す

姫路市 前田 美巳代

肩がきは女房殿が振り直し
雑草にまじれば野菊として目立ち
失恋と言える若さを持ち合わせ

新潟県 高野不二

酒値上げに米値上げよりあわて

明治生れ十銭をまだ口にする

ごまする奴を横目で見て無口

七尾市 松高秀峰

要領を本分として国破れ

妻に子に田植が負けて痛む腰

内職を終りモニターの仕事待ち

長崎市 吉田季生

筍の大地を破るエネルギー

金借りに行く日ネクタイきゅっと締め

フオークソング英語知らんがききほれた

広島県 南条露声

番頭にきけばどちらもええと言う

配達へ返品山積して戻り

褒められる度サボテン一つ減り

出雲市 王紫

饒舌になりふるさとの山が見え

花吹雪風の姿を舞うて見せ

キリリシヤンと予算を立てて動かれず

守口市 田中笑風

矢印に背いてみたいハイキング

背丈だけのびて息子の生返事

ダンブカー顔かくすよな黒メガネ

大阪市 奥川継之助

極言をすれば友情さえ重荷

友情も時には邪魔なものとなり

春宵の夫婦に他愛ない会話

八尾市 高杉鬼遊

退院の空は果しなく青い

本箱の整理古い日記にひつかかり

白鳥は無心熱狂の競馬場

鳥取市 近藤秋星

素人の目にも癒れぬ人に見え

これといつて取柄はないが飲みつぶり

お隣りも荻野式らし妻の耳

広島県 岩谷二三枝

七転び八起きの蔭に妻がいる

春の陽へ本意なく開くネギ坊主

れんげ草スモツグ知らぬ色で咲き

新居浜市 加藤勉

宴席で妻の歌聞き惚れなおし

サヨナラの文字が気になる告知板

独身に戻りたいよな娘に出逢い

新居浜市 高橋正整

善意から出た親切を妻がやき

途中下車したくなるよな美人降り

整形で親に似ぬ娘が一人出来

尼崎市 平井露芳

パパ抜けずパパの若さが気にかかり

姫路城にて

人体を写すに城が大き過ぎ

里がえり母はやつぱりお母ちゃん

新居浜市 村上水軍

今日からは母校と言える門を出る

ベトナムのニュース古傷呼び起し

無一文都心の窓に見るネオン

札幌市 河本雪男

恵まれた人がメーデー盛り立てる

労働は神聖なれど金も欲し

邪を憎む瞳が清く澄んでいる

高知県 山川勝子

鯛を釣るつもりか隣からワラビ

親の為に塾に通うてよく遊び

珍客に養子喜ぶ酒が飲み

京都府 菊沢破天

あきらめて置いたルックへ強く照り

はやされてきりように酔つて婚期過ぎ

せせらぎを止めて宅地の巾となり

竹原市 時広一路

排気ガス無しタンポポの咲く野道

名も知らぬ花も手折つて野道行く

病院へ足軽やかなのも保険

松山市 河本南牛史

四国霊場巡拝

アベックを追越して行く奥の院

御題目ビクビク動く喉仏

お遍路に出るふんざりを子等が付け

竜野市 森下峰子

退屈な女に熱帯魚の魅力

冗談も言えてほんとは好きでなし

ロマンスの芽生え二駅乗り過ごし

羽曳野市 麻野幽玄

斗病へ素直になれぬ木の芽立ち

思い出し笑い青春夢多し

ジェット雲いよいよ募る旅心

鳥取市 小林 由多香

下駄箱へいつまで置く気亡父の下駄

見送りの父がなばれと言っただけ

待ぼうけ赤電話まで見当らず

大阪市 池田 豊平次

ぬか漬を亭主があげる2DK

見なれない草が芽を出す埋立地

団地の階段はずむ音重い音

米子市 八木 千代

好きだった人を無縁に思う夜も

沈んでも浮いても男飲みたがり

遠い日の人気を胸にうらぶれる

高槻市 山田 スミ子

飛び石が済んだら赤字だけ残り

留守番の祖母電気ガマ便利がり

春山のスキー末つ子はり切らせ

宇部市 櫛部 いさ夢

長雨を悪く言いつつ出す碁盤

親切の嬉しさ家に持ち帰り

名古屋市 花東 千久良

今更の妥協おもむろに嘘をつき

切り花のいのち預ける美しさ

大洲市 堀内 曉風

ひもつきの政治道路も橋も出来

急ぐ旅濃霧半日船で飲み

北九州市 藤田 独楽

片付けは祖父母の役の子供部屋

急行車行楽の弁当立つて食べ

島根県 堀江 正朗

ひと言も言わない妻が恐い朝

妻の留守時がたたない日向ぼこ

島根県 堀江 芳子

吐きあげるまでのお酒がうらめしい

物干場赤い色あり娘が帰り

下関市 志賀 木石

血圧を話題にのぼす酒も年齢

住宅難知らぬみの虫かたつむり

河内長野市 森本 黒天子

エプロンの白さ女は見上げられ

牡丹咲いて呉れて草ひきよくはずみ

三次市 和泉 松風

ニュース見て胸を痛める事故のこと

コンクールの水着へ皆あやしい目

愛媛県 関 本 柳 剛

嫌い抜く為に病衣を白く着る

主役には所詮なれない影法師

鳥取県 山 本 正 子

見直さず挨拶出来る子に育ち

喪服よく似合つた日から強く生き

羽曳野市 河 原 林 比 呂 路

生きるため蜘蛛新しい巣をつくる

忘れよと誓つて別れ会いたがり

新居浜市 神 田 英 子

引越しのこんな所に探しもの

プラモデル欲しい間取りが出来上り

大阪市 藤 田 頂 留 子

平野大念仏寺万部練供養にて

稚児の顔エレキを真似る子と見えす

変る世を変らぬ菩薩陸橋を練る

竹原市 脇 本 政 己

味噌汁の味此の妻に満ち足りる

子が居ない四十の若さを笑らわれる

大阪市 田 島 案 山 子

くじを買う地下街今宵人の波

空港を発つと氣弱くなる大臣

鳥取市 藤 本 佳 女

新しいたたみ氣になる猫の足

青い眼も見直す晴着高島田

鳥取市 藤 本 鎮 也

赤い羽根さけてパチンコでみなすられ

又理屈つけて息子の無駄使い

鳥取市 藤 本 征 也

慰めは聞き度くないと聞きに来る

勧誘へのつびきならぬ人と来る

鳥取市 藤 本 和 宏

腹いせに蹴飛ばす石が跳ね返り

けちつけて負けさせといて買わず去に

鳥取市 河 口 忠 志

ふくみある誘いに老いの血がたぎり

セーターの仕上げ嬉しい母の指

大阪市 武 居 寿 美 司

売店で牛乳立ちのみ旅の味

花だけが話し掛けてくる孤独

新居浜市 曾 我 部 剛 生

文明の姿を隠す雪景色

手を振つて笑顔の十五瞳が光り

大阪市 伊 藤 一 雲

轢かれてもなお上げている小さい手
延着証明歩くダイヤも遅れさせ

堺市 斎藤亜也

春祭ガムを囁んでる仕丁あり

旧友に出会ったような古書の市

諫早市 前田つとむ

長生きの秘決五勺の酒で足り

哲学を愛し漫画もまた愛し

八幡浜市 別宮すき

釧とれ母がこいしい寮の夜

葱坊主と並んで鉄筋官舎建ち

大阪市 梅園摩耶

平々凡々という幸せにあきたらず

ノリ買えば乾そう剤だけの重さ

堺市 高橋千万子

女みな甘える声は別にもち

倦怠期甘えた頃のおほらしさ

諫早市 原田明春

乳はつて野良着が急そぐたんぼ道

美味かつたといえはあくる日又喰わせ

鳥取市 北野天人

団地住み名前と顔がくい違い
次次に病んで国保に相済まず

泉佐野市 大工静子

手不足で織工代りの妻忙し

信号待ちガイドの唄は外ででき

島根県 大森孝華

気まぐれな天気が着物皆出させ

大田市 藤田軒太楼

内幕がばれて弁解やめにする

高知県 岡本香芳

レモンの香知らず妻の手荒れており

鳥取市 藤本恵子

押売りを帰して母ちゃんほめてくれ

大阪市 西田溥子

親類に事故死の金をあてにされ

大阪市 佐々木文子

歯には歯を眼には眼の美でコンクール

大阪市 河井康宏

三つ四つ先きを読んだが行きづまり

泉佐野市 大工チヨ

娘等嫁き猫の数だけふえて行き

秀句鑑賞

前月号から

後藤梅志

人を待つかたわらの花嗅ぎもして

(薫風)

落ちついて、句を見ると句にころろが宿っているか、いないかがよく分かる。この句は短歌の端しうれのように、もの足らぬ感がするが、もし「嗅いでみる」とでも下五をとりかえてみると、句品を損こなうことに気付くこのままで味わって、果して作者の心になれるかどうか、今後の読者への課題であらう。思ったことを全部吐き出した句は、あまりに味気ない。むしろ感じるものを、読者の教養や、体験に訴える手法を身につけるべきではないだろうか。

人間が人間を損こなっているこの頃では、人が自然に返えり、花にあるいのちをさぐることがのぞましい。作者は、花に愛情を感じたのである。

思い出の丘がなくなるブルドーザー

(甲吉)

この句は、ブルドーザーという巨大な怪物のしかかってくる感じだ。思い出の丘を、一つ一つ消して行くのも腹立たしいが、思い出せば二十六年前、ガダルカナル方面で、一夜のうちにジャングルが、米飛行場と化し、我軍が壊滅させられたあの時の時と同じブルドーザーなのである。

これでいいのかという気持ちは、作者ばかりではあるまい。だがしかし、こんなことはアメリカ人の発明した自動車を、日本でも量産して不思議としないのと、同じ現象なのである。よっぽど確りしてかからねばならぬ。

恒産があつてスカッとせん男

(旅風)

「恒産」といえば、一応吉凶にも事を缺かぬ、資産家のことだが。スカッとせんとは、云い得て妙である。作者にとつては、好きでも、嫌らいでもないが、従いて行けなものである。こんな人はたまにあるもの。

戦前は、利子で食べて行くには、十萬か十五萬。これが恒産のある連中だったが、生活費の方は五〇〇倍。この比率でゆけば、この連中は、五千萬か一億の金持ちになる。それはそうザラにない。高々五〇〇万止りであらう。恒産のある人は、夥しく減ったもの。みな、何かしなければ、食えなくなつた。

ガタゴトガタゴトこんな山にも

人が生き

(奇童)

作者は嘘がつかない人らしい。句を見るとそれが分かる。ガタゴトガタゴトは、大八車にでも乗ってゆくものか。稚拙な表現だが、自然な描写を生かしていて好感がもてる。そんな僻地にも教育が普及し、子供の数がふえて行く。草深い分校にもドッジボールや、野球用具がふえるのであらう。

僻地の人は、人情はこまやかだが頑迷だ。大人の教育の方が、子供より厄介なもの。先生にとつては、この方が手数が掛かるものである。

そして、ここでも教育は、愛より以外にないことが分かつて来る。

すっぽりと帽子が深い一年生

(笛生)

この頃の一年生は、交通禍のため、みな、黄色い帽子をかぶっている。合羽も黄色いのである。しかしこの句の、スッポリ頭のはいる学帽をかぶった一年生の姿は、今も、吾々の胸に泛ぶ。まだつい二三年前までは、よく

見かけたが、可愛いらしいものだった。

こんな風景を、次から次へと奪ってゆく世の中は、腹立たしい。この句より、世の中のはうが、どうかしているのである。

女房を五目並べてひねってみ

(可住)

さき頃ある所で、「妻」というコトバがあるのに、女房というようなコトバは、使わぬ方がよいではないかという意見のあるのを、聞いたが。この句なぞは、女房でないと感じがでない。女房の肩をもつようだが、五目並べは案外に強いのである。小生もむかし、手古ずった経験がある。但し友人の女房だ。憂さ晴らしに、吾が家で五目並べて女房をひねってみるなぞは、それこそ男冥利というもの。此句、仲々情合ひのある句。

組をたたけば猫は走ってき

(英子)

猫は愛すべき動物のようだ。三年、五年と飼主に飼われて馴れてくると、部屋から部屋へ隙間から出這入りもすると、食べ物も、好き嫌いがはっきりして、始末がよいものらしい。この句のように、組で馴らした猫は、音を聞いてどこからともなくとんでくるものか猫が敏感で、組の音を聞きわけ、魔物に近い動物であることが分かる、面白い句だ。

川柳家の、猫好きは、おもしろい現象だ。

病氣と斗って居るのか眞悞

(八郎)

作者は斗病中で、これも入院中の作品であ

ろう。斗病とは、病氣と斗うことであるが、どうかすると、自分自身と斗っている場合がある。この句は、それを立証しているようだ。タバコは、「百害あって一利なし」と云われているが、医者から禁じられていても、止められぬ人も居り。それが果して病者の、命数を縮めるか、否かは、医者にも分からぬ。

ただ生への執着だけが、命数をとり止めている場合さえある。タバコとは、そうしたものだ。この句には、そうした、斗病のスリルを感じさせる、何物かがある。

咲きほこる花と一緒に散る候補

(城石)

今年は、総選挙と地方選挙がつづき、勝利候補者の数であったが、それが恰度さくらの咲く季節であった。花は散ってしまったが候補者のうちには、当選者ができ、落選者も倍以上の数に上り、悲喜こもごもであった。落選組は今頃どうしているかと気にかかる。僅かの票数の差で運命が一変したのだから、他人事とは思われない。

当選者も、落選者も、同じく花の寿命の如く、散ってしまった。カンドころを心得えた句。

働けば食えた時代の座りだこ

(小松園)

金に困らない人は、とするとこういう貧乏くさい句をつくる。とはいうものの、「座りだこ」は、穴勝ち貧乏したからとて出来る

しろ物でもない。日本人特有のコツコツ仕事に打込む、無形文化財的人物は、誰れにも出来る、甚だ貴重な座りだこである。

たて族は、実は堅実で、地味な商売をもつ人なのだが、こつちが好むものばかり造っていたのでは、この節商売にならないという、うつぶんもありそうだ。しぶく手堅い作品。

粉な雪を総身に受け別れけり

(葉子)

思いつめた若い人が、しばしの逢う瀬を案し、粉雪が降って来たのも忘れて、長い長い立話を、本意なく別れて来たロマンチックな場面を想像するが、句にはそんな匂いがしている。或は、作者の空想かもしれないが、句は必ずしも、実際に体験した場合のみには限らぬ。ただ作品が、首尾一貫しているかどうかであって、深く詮索する事は出来ぬ。

この句からは、純粋な愛情をかんじとることができた。

タバコ屋が移転ポストもついて行き

(笑風)

郵便を出しに行ったところが、ポストはあらぬ所へ移転していた。見ればいつも見馴れたタバコ屋が引越して、ポストも同時に移転していたということらしい。

ポストがあるから煙草屋が出来るのか。タバコ屋があるから、ポストが出来るのか迷ったのであろう。世の中にはこんな理解できないことが間々ある。面白い句があったもの。

明智光秀 (下)

富士野鞍馬

光秀が本能寺を攻撃した時には、徳川家康は、安土の帰りを大阪へ廻り、泉州堺を見物中であつた。それを光秀は追わたが、家康は伊勢から船で三河へ、ほうほうの態で逃げ帰った。羽柴秀吉は、信長の命をうけて、備中高松城の水攻めをやつて、もうすこしで落城というところであつた。

山崎合戦

光秀が本能寺を攻撃した時には、徳川家康は、安土の帰りを大阪へ廻り、泉州堺を見物中であつた。それを光秀は追わたが、家康は伊勢から船で三河へ、ほうほうの態で逃げ帰った。羽柴秀吉は、信長の命をうけて、備中高松城の水攻めをやつて、もうすこしで落城というところであつた。

そこがさる者毛利家と先づ和睦

(一五七)

本能寺の変を秀吉がきいたのは翌六月三日であつた。秀吉はすぐに毛利と講和して、五日に軍を返し、八日には姫路の居城に帰り、光秀追討の軍を整えた。そして十二日には山崎へ進んで陣を敷いたのである。

はじめ光秀は、柴田勝家は越中で上杉景勝と戦っているし、秀吉は備中で戦っているから、この二将は動けない。家康は旅行中だから片づけるのにわけではない。うまくゆけば毛利と組んで秀吉を挟撃する計画も考えていたところが、秀吉が案外に早く引返して来たの

である。そしてまた、当然加担すると見ていた女婿の細川忠興も、親しい筒井順慶も協力しなかつたのである。

天正十年(一五八二) 六月十三日、いよいよ山崎で、光秀、秀吉の決戦となつた。

わいわいは天王山の明智勢 (一一三〇)
御神輿を天王山へ堀尾すえ (一一三〇)

この戦いの勝敗は、天王山を占拠するかしなにかできまるといふので、天王山の争奪に双方が死力をつくしたが、秀吉方の堀尾吉晴がそれを占拠したのであつた。

はじめからこの兵力は、秀吉一〇、光秀三で、戦わぬ前からきまつていたようなものであつた。筒井順慶は、ようやく洞ヶ峠まで出陣して来たが、どっちへつかうかと日和見の様であつた。

日和見て順慶町の夜見世出し (一〇五三)

五月雨の日和見紹巴と順慶 (九一五)

順慶の熱氣智略の舌を巻き (一一五四)

順慶坊主用に日和を見 (一〇六三)

と川柳にも詠まれてゐる。「日本外史」には「筒井順慶は、大和の兵万人を挙げ洞嶺に

軍し、其の後援をなす。洞嶺の軍は勝敗を観望し、戦わずして走れり。」と書いてある。一説には、この順慶の不協力のために、光秀が負けたのだともいわれてゐる。

遂に明智軍の敗戦となり、光秀は退却して坂本に帰るべく逃げた。

山崎を頭べをかかえ鼠にげ (二二一八)
八まんの前をすたすた明智にげ (三〇三〇)
与次兵衛が門を光秀やつとにげ (拾五二九)
引返し幕で光秀してやられ (八九拾五二七)

などと川柳に詠まれ、秀吉が引返して来たのが光秀の負けとなつた。

小栗栖

「日本外史」には

「即夜、光秀は十余騎と囲みを潰して北に出で、馳せて坂本に向ひ、小栗栖に至りぬ。土兵四方に起り、林中より槍を以て其の肋を刺しぬ。馬より墜ちて死せり。」

と書かれてあるが、別に、小栗栖の竹藪のほとり、土民に竹槍で刺されたと伝えられてゐるので、川柳はその方を採り、いろいろ想作してゐる。

槍の出た藪は小栗栖ばかり也 (拾四二七)

藪からは棒よりひひ槍が出る (四〇二一)

せめて藪から棒なら明智いい (六七二三)

藪から棒の日最後と明智方 (四一六)

藪から棒の出たところは小栗るす (二五一九)

光秀を素人細工に殺すなり (八二九)

光秀を突たは野夫に功の者
藪にも功の者明智をころし
たけのこをぬすんだように明智され
(八四三)
(二六八)

栄華は三日竹槍は百年目
福来る即ち死すは明智なり
十兵衛はきうせん筋に天下筋
大願成就といふと死ぬ光秀
(二二二)
(八七二)
(八三〇)
(四一四)
(管初七)

「三日天下」といわれてゐるから、手相の
天下筋と弓箭筋の剣難の相に洒落てゐる。
猿に追はれた小栗栖の濡鼠 (一一三三六)
三日咲桔梗をちらす猿のちえ (七一四)
桔梗より盛りの長い百日紅 (一一三三九)
と秀吉を猿として詠まれている。

光秀はあつかいきりで絵がくさり (三三三)
天が下しるはしつたがあつけなさ
(安五鶴一)

光秀五十五才の最後であつたが、せめて十日間でも、京師に覇をとなえたことは満足であつたかも知れない。

湖水渡り

天正十年(一五八二)六月十三日、洛南山崎で、秀吉・光秀の合戦について、安土城の留守居をしていた明智左馬介光春は、光秀を心配して、合戦の様子を見ようと、安土城を出て大津の辺まで来ると、勝ちほこつた秀吉の方の、堀久太郎秀政の一万騎に出会つた。そこですこし戦つたが、血路を見出して、乗馬のまま琵琶湖に乗り入れ、水馬の妙技をつくして泳ぎ渡り、唐崎の松のあたりへ上り、光

秀の妻子の居た坂本城へ入つたのである。

その勇壮なことは、昔、中国の玄徳が曹操に追われて、端溪を馬で乗り渡つたのにも似て、琵琶歌にも「湖水渡」としてうたわれ、今にほめられてゐる。川柳もまた、

端溪と湖水は同じ左馬之助
たんけいもかくや湖水の左馬之助
(七五三二)
(九六四〇)

琵琶の音をひづめて鳴らす左馬之助
(一一三二)

左馬之助調子下りに琵琶を乗り
(一一三五三二)

琵琶に駒かけても引けぬ左馬之助
(一一三八五)

左馬が勇歸に懸る源五郎
左馬之助鞭で鎧の藻を払ひ
(一一五七二)
(二六三二五)

恐るる左馬なく湖水を打渡り
宇治川は茶だと湖水へ左馬之助
(二六三七)

小栗は碁盤左馬之助琵琶を乗り
其左馬は沖を越たる武勇也
(二四七二)
(七四三三)

附馬を唐崎でまく左馬之助
などと賞讃してゐる。その時左馬介のいでたち、白地に狩野永徳の書いた墨絵の雲竜の陣羽織を着た、派手な武者振で、錦絵にも描かれていた。

雲竜の湖水を渡る三日過
雲竜に敵も備をまきあげる
(五五三三)
(七八七)

永徳の竜が湖水を越え見え
左馬のめしたる雲竜は沖を越し
(二二六三三)
(八七三)

湖水逆巻雲竜の馬煙り
(一一四二五)

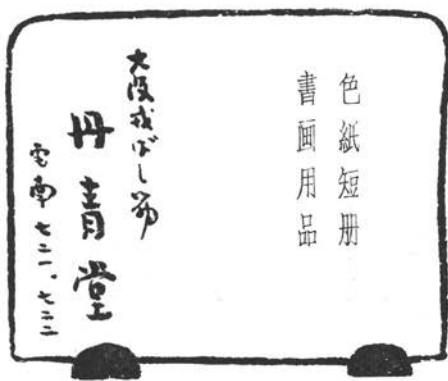
雲竜と臥竜智で琴湧で琵琶
と、川柳はそれも詠んでゐる。

ところが、坂本城も寄手に囲まれ、いよいよ火をかけるとなつた時、左馬介は、城内にあったいろいろの宝物、名器を錦の袋に入れて、櫓の窓から敵へ渡して焼失を免れしめたという美談もあるので、

古物は打死させぬ左馬之助
ほまれさは敵へかたみの茶器を出し
(七八三三)
(四三三三)

と川柳になつてゐる。

左馬介は光秀の従弟で、本能寺攻めに参加し、堀秀政と戦つて、四十六才で戦死したように史書には書かれてゐる。



近 詠

大阪市 橋 本 緑 雨

須坂市 高 峰 柳 児

寄席の笑いすぐに止ってしもうなり

廻転椅子出世した顔で迎え

逢えてくれたが故郷の話聞きもらし

次の恋育てる古い手紙焼く

伝説の淵シャッターに並ばされ

行き届く秘書尾を振っている態度

プライドがだんだん言い負かされている

・ 無 題 ・



代 巳 美 田 前

女体莊嚴 一心に子を洗う

このような作品を叔父の痴亭から聞かされた時、私と同じ体臭をもつ方のいられることを知りました。少女時代啄木の心に一種の共感めいたものを感じましたがそれは単なる悲劇のヒーローに対して自分をおきかえていたような気がいたします。人間のよこれ、罪、皮肉をサラリと匂にたくせる川柳は、やっぱりすばらしいとおもいます。

三年ほど前にコピーライターを志望して講座に一年ばかり通いましたが、広告の世界は絶対に一人よがりにはゆるされません。あくまでも客観的に、不可能を可能にする広告界は私のような自我の強い者にはいろいろと抵抗がありました。

た。しかし今にしておもえば、川柳の省略法が出来れば、広告のコピーも案外簡単ではなかったかとおもうことがあります。川柳には実感の句を強調されるようですが、胎動を夜の浜辺にたしかめる私には経験がないのですが、もしそうならばそうするであろうと、ふと考えた時の句なのです。

後家相と云われ亭主に黙っとき何年か前に、街頭で手相を見てもらった時にズバリ後家相だと云われました。私はずるい人間ですから、おそらく亭主があっても黙っていたことでしょう。

只一言好きと云えないまわり道好きだとか嫌いだとか云えるうちには、まだ恋でも愛でもないという

今年の路郎忌川柳大会に、もし全没だったら、私は川柳を今日までつづけていたかどうか分りません。そういう意味で路郎忌川柳大会は、私にとって川柳開眼ということになったようです。美しき抵抗しのび泣くふすま越かし
かえしたくない小走りの下駄が追い



コクヨ
便箋



のが私の恋愛哲学です。心で求め肌で感じる。そんなおぼろげな人生の一幕にもめぐり合いたいとおもっています。

作句する苦しみなら、自分をもっと、いじめてもよいと、このごろやっとわかりかけてきました。

★前号「一路集」ーウイंकをモールス符号にして送りーは白汀と訂正。

若本多久志著

川柳句集「老イの坂」

序文 中島生々庵主幹

五百数十句、二〇〇余ページ、B6版。

近く刊行の予定だが、まだ定価は未定。

次号にはすべて発表できるとおもいます。

ご期待ください。

★

ヒント寸言 鈴木村諷子

善人は他人の善いところだけを見る
悪人は他人の悪いところや

欠点ばかりが眼につく

○ 「一日読まざれば一日遅る」

停っていることは退歩していることと同じ
絶えず読んでいる日と読まざる日の累積が
お互いの上にどれくらい開きをつくる

○ 利巧者とは
いつも横着な方へ立廻る人間を言う

○ 可愛い孫なら

叩かれても撫でられた位にしか感じない
ほんのさわった程でも敵意をもった相手な
らなぐられたと思う
ただこちらの気持一つ

石川県 山上千太郎

日光・中禅寺

緑も水も濃霧の底の中禅寺

霧しぶき観光客の影と声

老妻は十歩おくれた霧の声

今治市 長野文庫

何食わぬ顔で翌日訪ねて来

失業の身に世の中が静かすぎ

神様の過失悪女へ美を与え

今治市 月原宵明

投売りの幾度破産したように

新緑の丸味へ高し天守閣

花の春婦警も軽く塗っている

大洲市 米沢暁明

妹のショックがわかる姉であり

素晴らしい事は無いかと懐手

長靴もやっぱりよける水溜り

名古屋市長谷川鮮山

日本の良さつぐつぐ竜安寺

叩かれてみたいその気になるも酒

和歌山市 秋月宏方

きょうの椅子学校ビリで出た男

(旧友を訪へ)

歯の話白髪の話友もふけ

(伊豆下田にて)

お吉お吉ガイド百遍ほどしやべり

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

大阪・東京・京都・なんば
高島屋

初歩教室

題 「雲がくれ」

菊沢小松園

辞典によれば、雲にかくれること、人が突如として見えなくなることある。川柳として入り安い題である。事実いろいろな雲がくれを見せて頂いて参考になった。

母だけは知れぬゆえを諦めず
雲がくれ一度便りがあつただけ

良心がよるめく集金雲がくれ

雲がくれ信じていたと泣きつかれ

第一句、親ごろ温かさである。初めは大騒ぎした人達も漸く諦めに変つてきて、最後まで諦めないのは母親だけになった。中七

が不安な心情をよく現わしている。第二句行方

を晦まして、やはり気掛り一度は妻子へ

当てて便りがあつた。善良な人の追い詰めら

れた心持がよく出てる。第三句、集金人の雲

がくれは沢山あつたが、この句を選んだ良心がよるめくと直感的に咏んで、女の人は見えぬ。強さを見せた、集金雲がくれは無論集金人の省略である、逆に言えはよるめき乍ら

も良心があつたことになる、老巧の作品。第四句、信じてた人を裏切ることの如何に罪

の深いことか、泣きつかれているのは、行方を晦ました人の両親であろうか、悲歎にくれるのは何時も善良な人達である。第五句、この雲がくれは軽い意味の洒落気のある雲がくれである、勉強に疲れた頭を一寸休めに窓からずらかった程度の軽い気持ちを見わした。雲がくれ初代は天の岩戸なり
叱るババ呼んでくる間に雲がくれ
雲がくれ親の出方を知つていた
雲がくれする気の中座とは知らず
点呼してみても気がついた雲がくれ
雲がくれ氣長に時効へ指を折り
第一句、雲がくれの初めは天照大神というのである大胆率直、一句の価値はある。第二句、無邪気な雲がくれである、叱り役のババを呼びに行つてる間に、子供の姿が見えなくなったのを、ずばり川柳して雲がくれと言ふ面白い。第三句、親の出方を予想して相談づくの雲がくれ勿論、恋の繾綣の結婚話からであらう、世智にたけた人のよく用ゆる手であるが、やがて目出度し、めでたしである。第四句、中座したまま帰つてしまつたのである。

四辺の人はそれに気づかなかつた、ここにも誇張した川柳的な技巧が程よく使われている。第五句、数を調べてみて気がついたと言ふのであるが、子沢山な家庭などを想像すると面白い点呼も雲がくれもみな誇張された技巧、はほ笑ましい家庭的な句になつて反つて肩の荷は軽い。第六句、深刻な雲がくれ、時効まで待つのは当人か、妻子か、金が絡み、人情が絡み、法律が絡む、僅か十七文字が、深刻な形容で通つて来る。

雲がくれにビリオドを打つモニタージュ

雲がくれする良心が残つてた
ほとばりのさめるまではと雲がくれ

雲がくれしたのにやはり役がつき

雲がくれ故郷で親子のまぢ焦れ

母だけが落ちつく先を知る家出

第一句、モニタージュ写真が雲がくれしたホシを上げたと言ふのであるが一片の報告に終つて残念、句意も浅い。第二句、行方を晦ますのに色々あつて、良心がないので雲がくれすのと、色々あつて面白い。第三句、ほとばりのさめるまで人の噂も七十五日的な図太さがある、演出に何人も人があつての合作である上五の用法で生きた句。第四句、役逃れのために欠席したのにやはり役つけになつたというそれだけの句に終つたもつと突込みが不足。第五句、行方が分らぬ、故郷で親子が待っていると言ふだけで一片の報告、これだけではありふれている。第六句、この家出に

母も片棒を担いだが、やがてみんなが笑顔に
交る雲がくれであつてほしい。

倒産へただ書置きがあるばかり 李 朋

雲がくれしたけど行場のない小鳥 寿美司

雲がくれした日もあつたと子をさとし

雲がくれしてまで添うた仲で愚痴 芳 子

陳情は秘書に任かせて雲がくれ 同 正 朗

雲がくれしといて別間で酔うている 同

第一句、これは危険な雲がくれ、中小企業

無理の終着が斯うした悲劇を繰り返す、句

の想としては頂き兼ねるがあり得ることで

ある。第二句、囲われて安意な餌にありつ

ている時は、瞳れの天空でもさて籠を出て羽

搏くとなるとあまりの広さに戸惑うものであ

る。小鳥に例を取っているが考えさせるもの

がある。佳句。第三句、親が子に過去を語

つて処世の道を説く、この子はすでに息子と

呼ぶ年齢であらうよい見つけどころ。第四句、

新婚当時のことは、年月が経つと薄れて行く

もの、恋愛の寿命は精々十年と謂われている

子供も増え生活も窮屈になれば、やはり愚痴

も出ようというもの、世俗の一端を突く。第

五句、こうした政治家もあらう、秘書に任せ

切りで、先生は御留守の作戦であらう、併し

選挙が近づくと、こんな手合ほど態度が変わ

る。第六句、軽い雲がくれ一寸姿を隠した程

度、用語も作句上の誇張したもの、実際の

なものとする、この句纏め方も軽いが句意も

浅い。

清 泉

雲がくれ噂の女がついており 同 白 汀
雲がくれ成程世帯が派手過ぎた 比呂路
雲がくれ知らぬ労組が氣勢あげ 保 夫
第一句、日本の四方は海に囲まれている関
係で、国際的な犯罪は育ち難いと言われて来
たが航空機の発達はその考えの甘さを裏書す
る様になった。この句は島国の逃れ難さを句
にしている、一片の真理は判る。第二句、身
を隠さねばならなくなった次第も、例の女が
ついているからと決めて掛つている四辺の推
測も、まんざらでもなさそう、女とは或る時
は損なものであり、ある時は徳な者である。
第三句、案じていた通り生活の派手さが行き
止まって、行方を晦ます様になった、周囲の
心使いもよく判つて面白い。第四句、真面目
な雲がくれでは、この落つきがあつて再建
も出来る、そこには信用という裏づけがあつ
てのことでもあらうが。第五句、社長の雲が
くれている世相を皮肉って巧者な句になった。
雲がくれした児に気づかぬ特売場 天 人
雲がくれ時効になつて舞い戻り 紫
ゴシップでなかつた証拠雲がくれ 同
生活があつて雲がくれも出来ず 句 案 坊
計算の上でのスター雲がくれ 竜 天
妻の座をおりて一日雲がくれ 二三枝
第一句、特売場で血迷うている間に子供を
見失つたのである、少しでも経済的にと願う
母親の悲願が、句の裏に隠されている。第二
句、この句の持つ時間的な経過の長いこと、

時効になる迄辛抱して、舞い戻りの下五が利
いている。第三句、一片のゴシップにしては
深刻、早く手を打たなければ大変になる。第
四句、雲がくれの出来る人はまだ幸せ、切端
つまれば雲がくれも出来ぬ。第五句、計算づ
くの雲がくれ、万事が人氣に関係する、スタ
ーともなれば、人氣取りの一手段でしか過ぎ
ない。第六句、一日の物見遊びを雲がくれと
洒落たのである、妻の座をおりてがない。

気がついて見れば二人消えている 頂 留 子
雲がくれ親の出方待つ二人 松 風
あと頼む体よく社長雲がくれ 軒 太 楼
雲がくれいつの間にやら立候補 破 天
選者吟

雲がくれ富士は寝ながら見える宿
雲がくれ義理の親娘とみなに知れ
八月二十日締切 十月号発表題
題 「金言」

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目二番
二十二号 菊 沢 小 松 園

若本多久志著

川柳「親ごころ子心」

実費 二百円
送料 六五円

要望にこたえて騰写印刷で百部限定出版
申込所 大阪府南区鯉谷仲之町二〇

川柳塔社
「親ごころ子心」係

足

清水一保選

足の向くままに失恋ただ歩き
足早の老父は明治の世を歩き
足組んで女自由と云う構え
ボリウムでカバーして居る足線
産院の孫を見分ける足の裏
足もんで呉れる嫁あり老の幸
足先から頭へ素早い女の目
足もとを見たかたたけるだけだ
名優と共演してます馬の足
足音を読みとるコツで妻は老い
会費より二倍の足を出して酔い
年毎に足から忍び寄る老花
初サラー足音早く娘の帰宅
家内中乗せて愛車の出足よし
風雪に耐えて大地に立つ裸足
足げには出来ぬ落花の純白さ
安木節踊る気クツ下脱ぎ始め
天気晴朗なれども足止めさる居る
苗植える足にかすかな地の温み
胎動を支える妻の太い足

足癖はこうでござんす下駄のちび
男の目意識水着の足を組み
泥沼と知って抜けない弱い足
子の靴のそばに小さく父の靴
足軽く我が家へ向う月給日
足で戸を開け文明の子の育ち
おしっこが出そうになった足の音
家だけは忘れていない千鳥足
切つなさが足早になる愛の距離
足一本残して逃げて行った蟹
突かけの素足も通る法善寺
佳
足出した飲屋へおいとく自動巻
建てました足が出ましたと云わず
働いた手足を伸ばす青畳
両足をかかえて故郷を恋う飯場
足跡は位牌になってから云われ
けつまずく足へふん張る足がある
蒲団からはみ出る足に子が育ち
屋台の灯らしい足を吸い寄せる
人
一本はビルマに置いて来た義足
地
低辺の足がもとの明日を生き
天
足音に動悸を打った人と老い
軸
四本の夫婦の足で立つ我が家

曉明
頂留子
軒太楼
どんたく
祥月
秀峰
露声
章雅
千久良
七面山
誓二
痴亭
恵二朗
旭峯
いさ夢
秋月
凡九郎
春巳
千代
芳仙
痴亭
夢

エリート

麻生アート選

エリートの自信団交から崩れ
エリートの他人を寄せず独り居る
エリートの意識過剰で嫌がられ
帰省してエリート振った口をきき
エリートも時よ時節の鎌を持ち
エリートへ二浪三浪までもして
エリートが一目おいてる生字引
新入のエリートへおんな眼が揃い
雑草にまじってエリート気にとず
エリートも人の子酔えばくだを
エリートがズーゾー弁でまくし
惜しむはエリート土根性がない
エリートを自負した顔が羽田発つ
人間としてはエリート留年組
エリートの意識孤独をかみしめる
エリートも同じラッシュの歩運ぶ
エリート病むお見舞に来る人も
エリートの筈が末席気に入らず
選良がもうお手盛りを始めとり
東大というエリートのプロフィール

十九平
松風
誓二
光郎
木魚
百酒
弘朗
初甫
杜的
雄声
摩耶
曉明
伊三郎
紫
すき
文平
光道
いさ夢
秋月
無聖

エリートの先祖であつた立志伝
エリートに押され名門ビリに出る
天降るエリートへポスト新設し
地味なネクタイもエリートといふ好
エリートの積り周囲は承知せず
道はるかして大学は出たけれど
エリートとしてのコースにかけ
エリートを誇る名所のPR
エリートに見合写真が又蹴られ
エリートの失意家業を継がされる
エリートの会合お女将多忙なり
当然の顔でエリート廻り椅子
おしゃべりエリートがもコマージュ
エリートに付った浜辺の岩の松

道雄 齊花 素身郎 古方 頂留子 軒太楼 祥月 どんたく 酔夢 多蘭子 二三枝 佳女 正子

同じ部にエリート二人居て揉める
保釈金エリートそれでけりがつき
おでん屋の酒エリートの角がとれ
エリートをそろえ現場と溝ができ
高飛車のエリート商法受け入れず
いつまでも親エリートの世話を焼き
エリートは金もついでる章を受け
夫婦ともエリート近所にとけ込めず

十九平 芳子 宵明 宗太郎 道雄 千代 多蘭子 七面山

エリートの憂うつ蒸発してみたし
エリートの恋は冷たい色で燃え

酔夢 芳仙

未来図へエリート歩き疲れかけ
軸 サラブレッドを哀れに思ふ日もありて

古 書

佐野ト占選

恋人をたずねる心地古書漁る
一と筋の道を開いてくれた古書
一冊の古書を頼って食う易者
温めた詩集いつしか古書となり
不肖の子形身の古書を繙かず
耽読の古書のしじまを梅雨の窓
何時読むかわからぬ古書をうす高く
戦官の目となり古書をくり返し
新しいセンスのヒント古書から得
春宵へいつしか古書にねむらされ
日本のところろ古書に教えられ
虫つづる聖書に恥じること多し
雨読今日古書をなでたりさす
とどかないとこで古本売れ残り
古書に埋もれ生活は妻任せ
ほつたるか古書の整理へ腹が立ち
二十年もう古書という黄ばみよう

不二 弘朗 いさ夢 白汀 素身郎 千久良 双葉 瑞枝 十九平 孝華 曉明 すすき 恵二朗 春巳 素身郎 初甫 頂留子

この古書に疎開の日々がよみが
古書読みて暫し明治の人となり
古書の嵩屋は目方だけをふみ
図書館で同じ古書同じ顔が借り
定年の古書を繙く暇も出来
古書漁る余生も楽しべれり
古書のある家系を母はまだ誇り
古書読んでネタを仕入る作家
古書までが投資ブームにまきこ
その辺をさがしてくれと古本屋
古文書に寺のピンチの借用証
奥付に生きる 一元五十銭
次々に出て来てもやっぱり古書は古書
いつ来ても同じ所に同じ古書
古書に埋もれて浮世を遠くいる
甘美なる詩情が古書の一ページ
掘出した古書から謎が解けはじめ

木魚 誓二 百酒 芳仙 どんたく 光郎 七面山 摩耶 水車 春巳 頂留子 季賛 齊花 宵明 旭聖 旭峯

二頁だけ覗かせガラスの中の古書
寄附された古書の保管に困らされ
こんな値になつてゐるのかと戻し
古書読んだ頭が新書につきあたり
古文書へ明治の父が役に立ち

章雅 いさ夢 古方 藤波 露声 千翁

感覚の相違で古書が面白い
明治百年古書を引出す用が出来
日本の歴史の中に古書が生き

季賛 旭峯

大 萬 川 柳

戸 籍

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 八百二十二句
 入選 八十六句

大阪 誓二
 大 阪 誓二
 羽曳野 重夫
 戸籍からはみ出しそうに子が生れ
 戸籍係仏頂面の人ばかり
 鳥取 正子
 子を籍に父となつたを自覚する
 西宮 百酒
 騰本に屋号で念押す村役場

委任状書いて離婚を届けられ
 熊本 芳仙
 恩給があるから戸籍ぬけきらず
 大阪 寿美司
 騰本をいくつもとって職さがし
 姫路 美巳代
 戸籍課で当用漢字おしえられ
 下関 不水

大阪 与呂志
 はじめての戸籍二人で取つてみる
 尼崎 利美
 入れるにも出すにも戸籍金が要り
 岸和田 千舟
 本籍がどこか分らぬほど変り
 伊丹 千尋
 名ばかりの妻は戸籍に胸を病み
 守口 瓢太
 戸籍では他人子供はもう二人
 鳥取 佳女
 名門の戸籍女系のつづき家
 羽曳野 比呂路
 保証して戸籍抄本まで取られ
 鳥根 紫

戸籍簿は明治の姿順に消し
 鳥取 礎山
 たつた七日生きた籍に名をとどめ
 泉大津 徹也
 もう一度戸籍と顔を見くらべる
 大阪 凡九郎
 思春期の舵騰本が握つてた

戸籍調べみたいない司会者にも困り
 和泉 東天紅
 籍のこと手紙に添えて二度三度
 鳥根 正朗
 派手に結婚籍入れぬままもう別れ
 大阪 一栄
 一つ家に籍が二つなる佳き日

西宮 玩柳
 ご先祖にあやかる籍の頭文字
 篠山 与志

芸人の事故本籍と齢がばれ
 笠岡 白梅子
 戸籍にはどちらも触れぬまま別居
 鳥根 芳子

こばれるようなお腹で籍を入れた
 大阪 章雅
 跡取りに孫入れる気で嫁にやり
 岡山 一声
 戸籍では妻実権は二号持ち

戸籍には好いた同士と書いてなし
 西宮 多久志
 大阪 あいき
 若い妻もろて入籍せがまれる
 笠岡 忠三
 戸籍まで調べておいて不合格

戸籍とは字画違つてたまま証書
 豊中 古方
 今日からは他人ですわと籍を抜き
 大阪 十悟
 ふる里に墓あり戸籍そのまんま
 大阪 琴女
 出生届科料覚悟で名に迷い

戸籍だけ残し都会に居るという
 大阪 滋雀
 母だけの戸籍でもよし披露宴
 大阪 痴亭

玉造川柳会

時 七月十日(月) 六時
 題 気合い・休み・宛名
 所 玉造交差点南一〇〇米
 大阪信用金庫

南海電鉄川柳会

時 七月二十日(木) 六時
 題 制服・くい違い・怪獣
 所 ナンバ高架下
 親和クラブ

南大阪川柳会

時 七月二十日(木) 六時
 題 原色・巾・鈍る・ギャンブル
 所 阿倍野区松崎町三ノ一〇
 大 萬

母ひとり戸籍と共に母家守り

大阪 没食子
 意地もあり不倫の妻の籍出さず
 大阪 旅風

聞きあわせ戸籍に乗りぬうら話
 大阪 春果
 東京へ栄転戸籍まで移し

大阪 小松園
 寄つてたかってだまされたい戸籍
 大阪 阿茶

本籍は船場にあつて二階借り
 大阪 文秋
 成人式すんで戸籍のこと話し

南河内 吸江
抄本も要らぬ会社ですぐつふれ

富田林 美房
戸籍だけある大阪は道になり

大阪水 客
以下空白戸籍の僕も独りぼち

大阪梅 里
孫の顔見てから折れて籍を入れ

長崎 季生
島育ち戸籍係が名付け親

大阪吉 郎
本籍地だけで県人会長に推され

孫出来てから養子の籍を入れ
長男の籍は二人で入れに行き

篠山 宏子
村中の戸籍和尚はそらで読み

大阪漣
本籍も言うて家出の泣きぐずれ

ぐれ出した訳を戸籍は知っている
わかるとき来るまで戸籍秘めて

富田林 花梢
今はただ戸籍がつなぐだけの縁

結局は元のひとりになる戸籍
愛媛 すすき

冠婚葬祭戸籍係無表情
戸籍とは関係のない子にかかり

広島 露声
こんな字はと戸籍課そっけなし

もろた子の籍には触れず子は育ち
岡山 藤波

籍の違うわけを子供に語られず

戸籍謄本要るときだけの子の便り
中絶も三度目となり籍を入れ

入籍がまだでよかった話つき
笠岡 要次

内縁のままで続ける遺族扶助
入籍してそろそろ地金はげかかり

五島 千翁
嫁ぐ娘へ戸籍身をさくように抜き

家柄を書けぬ戸籍へ口惜しがり
東大阪 清人

米屋のオッサン戸籍係に顔が利き
新しい戸籍で施設の子が門出

戸籍課ではめて貰うた名に死な
騰本までおいて来たのにことわり

岸和田 きさ子
戸籍にはのらぬ内助の妻であり

あかんたれ認知も出来ぬ子を生
戸籍にまで触れマスコミのおつかい

五 客
尼崎 秋水

籍持ってかえ。今度は手きびしい
大阪 幸雄

戸籍簿のシミもコピーにして渡し
焼跡に戸籍のこしてビルが建ち

東京 泰造
戸籍では独立親の庇護で食い

島根 代仕男
後添えがおちつきそで籍を入れ

大阪梅 里

後添えがおちつきそで籍を入れ

人の句

大阪 双葉

嫁ぐ日に籍の秘密を明かされる

地ノ句

岡山 旭峯

勘当はしたが戸籍はそのまんま

天ノ句

堺 一舟

戸籍から消えても養子血を残し

大萬川柳ベストテン(五月現在)

美房

一、〇 富田林

清人

一〇、〇 大阪

連舟

八、〇 大阪

弓彦

七、〇 岸和田

きさ子

七、〇 大阪

琴光

七、〇 大阪

魁太郎

七、〇 出雲

柳志

六、五 大阪

文秋

六、〇 大阪

滋雀

六、〇 大阪

双葉

六、〇 大阪

利美

六、〇 大阪

醉夢

五、五 香川

泰悟

五、五 大阪

幽谷

五、五 岡山



マイペースで飲もう

アサヒ
スタイナー

昭和四十二年度第七回
兼題「附近」

締切 七月二十五日

発表 八月二十日

第八回予告
兼題「タイトル」 五句以内

締切 八月二十五日

発表 九月二十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎町

三ノ一〇

大萬川 柳会

昭和四十二年七月現在

川柳塔社同人

磯野 石坂 石倉 石川 石居 井阪 池田 池田 家沢 安平次 安藤 阿万 天見 尼部 阿部 麻生 浅野 浅川 吾郷 青山 青木
与三 新旅 侃流 高志 東天 紅水 古心 齊花 弘道 桂仙 万的 幸雄 緑之助 柳太 阿一 ト 芳郎 玲人 慶之助 遊星

梅田 有働 臼井 牛島 魚住 植山 植村 上田 上田 上田 上田 岩田 今西 井上 井上 碑 伊藤 伊藤 出市 市岡 伊丹
久芳 三林 水京 満潮 武助 客遊子 加利 翠光 紅溪 美代 章雅 湧三 旭彦 茶仏 泉陸 直奇 没食子 曉舟 阿喜良

大西 大鶴 越智 大谷 小田垣 太田 太田 大崎 大坂 奥村 奥谷 置田 隠岐 小川 小川 小笠原 岡田 大岡 岡本 岡嶋 岡崎 江國
八喜 一月 都牛 良子 湖平 博正 形水 丹路 弘朗 ふじ 不醉 恒明 静観堂 拳法 秋月 昭三 芳道 祥月 幽谷

北川 黄瀬 岸沢 菊田 菊原 神端 川村 川村 河村 河村 河原 川竹 川口 川岡 河井 河相 賀本 神谷 金井 葛城 笠原 加川 大山 大森 大原 小浜 小畑
春美 南柳 小松園 いさむ 幸児 東雲楼 好郎 瑞川 日満 ゐる 松風 弘生 霊眼子 庸佑 すゝむ 凡九郎 文秋 伊三郎 吸江 カロ女 雅城 娛句 葉香 牧人 自有浪

児島 小松 小西 小西 後藤 高津 小谷 小島 小池 工藤 桑原 黒川 蔵本 久米 国弘 楠本 楠田 草深 木山 木山 木村 木村 木村 木村 北村 橘高
与呂志 義雄 雄々 無鬼 梅志 徹也 仙山 蘭幸 しげお 甲吉 喜風 紫香 白梅子 奈良子 半休 英三郎 和子 醉升 要二 遠路 一利 匡人 千容 十悟 三歩 薰風

田垣 高木 大工 傍島 関戸 杉原 菅井 新谷 城谷 清水 清水 清水 清水 嶋田 島居 直原 佐野 佐藤 桜川 酒井 酒井 雑賀 近藤 小林 小林 小島
方桃 睦夫 静馬 宗太郎 愛鳩 康郎 笑痴 一舟 義介 白柳 保郎 三郎 七面山 占童 不水 清月 五勉 凡生 孤呂二 トメ子 孝正 無聖

中筋 仲藤 内藤 内藤 戸田 友淵 富岡 都倉 遠山 天正 寺田 土谷 辻川 辻川 辻山 築山 津秋 田村 田村 谷沢 田中 田中 田中 田中 竹内 高橋 高崎
三幸 どんたく 幸子 さ子 古方 貴山 淡舟 求女 可住 千梢 花宵 一仙 喜水 圭水 快夢起 六花 美智子 藤波 好祐 万里歩 十方 狂二 蛙眠子 圭三 雄声

新同人紹介

堺市南清水町三ノ二ノ一〇

新谷笑痴

—白柳・梅里推薦—

西森花村 西辻竹青 西川誓二 西岡洛醉 西尾青一 西尾義一 西尾義一 新岡回天 二越俊爾 永松道雄 永藤弥平 長藤文庫 柳谷鶴丸 那谷光郎 中島生々庵 中島小石 永尾永断 中川滋雀 中川晃男 中川淳子 中川ゆきを 中村九呂平

林野 林昌男 林夢虹 林葵丘 林清生 林胡蝶 林奇童 浜田久米雄 浜野光治 羽原静歩 服部十九平 長谷川三司 橋本緑雨 野田素身郎 野呂鷄汀 野村岬月 野村味平 野村太茂津 野々口美舟 奴田原紅雨 西田一栄 西田柳宏子 西垣錦風

藤井明朗 福田丁路 福田多可志 福田正則 福田鉄児 福田多蘭子 弘津野柳慶 平野尤三郎 平田実男 平田太希平 平尾井満秋 菱田代仕男 久家代仕男 樋口舟遊 馬場魚山 馬場夢生 長谷川義英 長谷川紫光 羽佐間柳葉 原独仙 原千里

満生拝山 間島青丹子 丸川初甫 松田半月 松本忠三 松本吉太郎 松塚美知代 松川たつみ 松岡委滄浪 松江梅里 榊本落兒 正山北海客 前山柳志 本多惠三郎 本多清人 本庄金三 細呂木魯水 古川奮水 古川魔花麗 舟木与根一 藤原秋月 藤村礎山 藤本礎山 藤岡花梢 不田二三夫 藤岡花梢

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！



室谷鉄舟 室井光丸 村山飄輪 村田春太 村上旭巳 村山峰童 三輪円樂 宮地双楽 宮口笙生 宮川珠突 水谷あいき 水谷竹荘 光谷陽子 水好子 水粉翁 三井醉夢

吉田圭井堂 吉岡美房 横山一立 山本素兒 山本阿郎 山内静茶 保西岳水 八木摩天 森本良夫 森本法泉 森田布堂 森田茗人 森田下論 森川すみれ

渡辺乱坊 渡辺独歩 渡辺曉童 脇田潮勇 若柳多花 若本あき志 若本久坊 山田千太郎 山田草右 若林一乃 米虫乃 吉原紅月 吉田水車

平安川柳社創立十周年記念明治百年
全国川柳大会に出席した阿部佐保蘭
(右から) 中島生々庵、池田可實氏



柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼平安川柳社創立十周年記念明治百年全国川柳大会は昭和四十二年六月四日午前九時から国立京都国際会館で開催された。東洋一の会場で四百七十余名の出席者を得た劃期的な大会で殊に印象深かったのは、平安川柳社同人が真赤な揃いのネクタイを結んでいたことでそれは日本刀に鍛えられる寸前の炎の鉄の色に思えた。一人一人が灼熱してていた。大会の殆んど総てのことが立派だった。席題

選者として壇上に登ったわが社の清水白柳氏は、麻生路郎先生形見の背広をびったり身に付けておられた。満場の柳人は師弟の情の美しさに深い感銘を覚えた。川柳塔から中島生々庵主幹をはじめ多数が出席その快挙に賛同した。正本水客氏は京都市長賞のトロフィーを、西田柳宏子氏は秀句第一席の賞をそれぞれ獲得。

▼大谷月都氏(愛知県同入)は愛知県西春日井郡西春町石橋郷浦へ新築転居▼岡本香芳氏(高知県)一文あきないをはじめました▼河村日満氏(鳥取市同人)は六月十日来阪、一三夫氏と電話の対面された。▼村田周魚きやり吟社主幹追悼句会は七月二日(日)正午から東京都千代田区外神田、神田明神参集所で開催。兼題(投句は六月二十日迄)は親しい・譲る・牛め・義理・予感・残る・月初め・生け花・戸棚・移る・

遠慮・川上三太郎氏の「故人を偲ぶ」お話がある。▼北海道川柳大会は昭和四十一年北海道年度賞受賞、敦賀谷夢葉十三回忌を併せ六月四日旭川市の神楽岡会館で開催された。▼伊志田孝三郎氏(名古屋市)は榎田竹林氏(静岡市)と伊豆下田に遊び、柳談雑談の花を咲かせられたと▼第三回さいたま川柳大会は七月三十日午後一時から浦和市の埼玉県労働会館で開催される。題は逆らう・息抜き・まとめる・コンビ・余裕・勝つ・赤、席題四題特別課題は当日発表、各代用は十五円切手七枚、封入の上七月二十日までに埼玉県立野市下落合一一二五柳沢考人方第三回さいたま川柳大会保完。

▼平安川柳社は昭和四十二年六月一日創立十周年記念特集として百二十三号を発行▼北川春果氏は六月十六日付で大阪市交通局病院長になられ、新住所は大阪市阿倍野区丸山通一の六三の一▼家沢齊花氏(明石市同人)は五月十三日来社、生々庵、小石主幹夫妻や、編集部の一三夫氏、葉子さんと歓談された。主幹の色紙1心の眼ひらけばおがむことばかりに感銘、座右の銘とし柳道に励みたいと。▼服部十九平氏(岡山市同人)から、「本年も過日市沖縄へ行って来ました。ベトナム戦の基地の様相をひしひしと感じます。戦跡巡拝最後の歌は君が代でした。」▼藤井玄武洞氏(せんば同人)は六月六日脳軟化症でお急逝、享年七十三歳。なお追悼句会が十九日に行われた。

▼阿部佐保蘭氏(東京都)は六月三日夫人同伴大和郡山へ。母校の講演で後輩千四百人を前に「川柳と翻訳について」の講演を行い、四垂仁天皇の御陵へ参拝、四日は京都の全国川柳大会に参、静養の後八日帰京された。▼中島小石さん(大阪市同人)は五月八日から十四日まで七日間、ヤノ・ギヤラリで開催の第二回青瑠社女人グループ日本画小品展に力作を出展好評を博された。

▼八木摩太郎氏(堺市同人)は胃の手術も順調で悪性ではなかったため近く退院、左久良・好郎・梅里・白柳氏らの肝入りの堀の川柳会連合で全快祝賀句会を六月二十五日開催。▲森田布堂氏(鳥取県同人)は五月八日故大前鳴悦氏の墓参を思い立ち、急に

美 しい 心
美 しい 花

富田林 公栄社(07212) 2064

お留守であったと。「鳴恍の一句墓から聞えそう」

▼河相すゝむ氏（西宮市同人）は五月二十四日二十五日の両日広島へ学会出席のため出張、胃の方依然もやもやしてこもとサボリ勝ちですと。

▼藤村メ女さん（大阪市同人）の長女達子さんは五月十四日の母の日に良縁とこのい、大西悦男氏と農林会館で華婚の典を挙げられたお慶び申し上げる。

▼山田季賛氏（高槻市同人）は五月十四日第八回建設機械展示会を見学、土木機械の発達に目を丸くするばかりであったと。「人夫泣かせの機械とどんどん造られる」

▼浜野奇童氏（岡山県同人）は五月十一日「フジテレビ小川宏ショー」に弓削川柳社の川柳角力に行司として出演のため七面山・紫光氏ら八名と上京、落語家のこん平・つばめ・えん楽

・小痴楽さんらと競演、好評を拍された。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
タダ薬品



アリナミン

五日に帰宅された。「俳優から歓迎を受けて悦にいら

▼河本南牛史氏（松山市人）は四月霊場巡拝の川柳行脚を二十日余りに亘って行い各地の川柳会で交歓、お寺へは一句書き残すなどとても愉快な旅であったと。

▼木村平一郎氏（石川県）は江沼郡山中町の国立中山病院第二病棟へ入院、胃潰瘍の治療をされる。

▼丸萬味噌・醤油の川柳。題「丸萬」「味噌」「醤油」いづれかを読み込み、十句までを官製ハガキに住所姓名明記。締切は七月二十日限り、佳作三十名に賞呈応募者全部に発表誌送付。選者金子吞風先生、投句は長野県飯田市本町の一、飯田天柳社、藤井紫苑。

▼備前川柳社は昨年町内三十一カ所に交通事故防止川柳の標柱を建てたことに對し、備前警察署長、和氣郡交通安全協会会長から感謝状と記念楯を贈られた。

▼本多柳志氏（大阪市同人）は五月三十日若狭公園の新緑の美しさを見に来ました。湖はもう夏の色にピール。

▼吉田水車氏（名古屋市同人）は六月四日奥黒部探勝

六月と云うに冷めたとき黒部川。

▼浅野芳朗氏（小松市同人）は六月五日来社、夕刻から本社句会へ出席された。▼本誌の表紙へ麗筆をふるっておられる直原玉青先生指導の「青玲社余技日本画展」が六月十三日十八日まで阪急百貨店八階催場で開催。生々庵、小石主幹ご夫妻も出品され連日好評だった。

▼鷹巢一子さん（東京都）は「川柳の道を永年歩み続けた唾三昧のこと故どこかでまだペンを執っているような気が、本を掲載するたびに致します。せめてもう四五年皆様ののお仲間入りでいた欲しかったと帰らぬぐち

▼戸田古方氏に内孫誕生。

の一人言です。」と。告別式は五月二十三日、西

▼生島鳥語氏（大阪市）の藤大阪市立中央図書館長はじめ、各柳社多数の柳人列席の下に盛大に営まれたが本社からも生々庵主幹をはじめ、白柳・梅里・小松園・季賛・薫風の諸氏が冥福をお祈りした。

▼東野大八氏（岐阜県）から「過日朝日新聞で漫才作家不二田一三夫氏の記事拝見、うちのカーちゃんもこれをよんで敬服。一度あいたいという。大井正夫氏編集、発行の「美しく」が折よく到着したので時代劇の親分ですね（同紙に写真と原稿掲載）」と好意あるヒ笑でした。大井正夫も原稿を貰ったときから大喜びでした。

▼優雅な書き味



タチカワペン



本社六月旬会

会場 自安寺

五日 午後六時

愛隣地区の暴動と関係はなく出席率がいつもより低いのが小松市から同人浅野芳朗氏のご出席は旬会部をよろこばせてくださった。京都、姫路方面からわざわざご出席いただいたのが、地元市内からはビビたるもので、なんとかもうすこしご出席ねがえないものか。柳話は戸田古方氏の「カナ書き恐るべし」で講義よろしく熱弁をふるわれた。六月旬会のNO・1は本庄金三氏の秀句にかがやいた。―九時半閉会。

(河井庸佑整理)

出席・与呂志・白柳・一三夫・貞山・双葉・古方・滋雀・いさむ・頂留子・芳朗(小松市)・万的・白溪子・杜的・柳太・水客・痴亭・静馬・一舟・梅里・柳宏子・誓二・たつみ・葛城・吸江・小松園・文秋・好郎・舟遊・芙巳代・愛論・きさ子・野迷路・弓彦・清人・トメ子・すみれ・花梢・一扇・多久志・形水・静波・生々庵・金三・千梢・宣介・六竜子・季賛・葉子

席題「膝ぼし」

阿部柳太選

膝ぼしもたたいて診断書いてくれ 芙巳代

膝ぼしが痛くなるまで意見され中座する膝ぼし器用に移動する膝だいて夜が淋しい下宿の灯膝ぼしの皺が気になる初夏を着る膝ぼしで押して返事を迫まれる風呂に入る母の膝ぼし竹のよう膝ぼしの出せる若さをうらやまれ膝ぼしをまくって見せるサロンパス膝ぼしの丸みわが娘もお年頃国宝へ膝ぼしみんなかしこまり開病の膝ぼしだけがデカくなり膝ぼしをたたいてとんちんかんを言いHやと言うてミニスカートを止めず膝ぼしに見とれ一と駅乗り過し膝ぼしを隠す仕ぐさもまだ女神経痛のはしり膝ぼしから痛み靴はいたまま膝ぼしで歩いて来座りダコ憶面もなくミニで行きスカートの丈けが老父の気に食わずひざぼしを震わせ小心がゴネ汐千狩膝ぼしまでは娘がはいり膝ぼしの赤チンとれぬ子で達者膝ぼしから女くの字に掛ける椅子貰い風呂膝ぼし辺の湯に困り川遊び膝ぼしまではだまるとき膝ぼしで横に歩いて来る銚子柳太

席題「自働ドア」 樋口舟遊選

魔術師になつてゐるような自働ドアはろ酔いに自働ドアが気に入られ泳ぐよな手つきになつた自働ドア 静馬

自働ドア一思わず出した手のやり場偽小切手掴ましといて自働ドア一自働ドアやっぱりレイ先に入れ胸張った姿勢で通る自働ドア一自働ドア一に自働ドア一と書いてる自働ドア一に叱られそうな忘れもの策もたぬ男の前の自働ドア一自働ドア一銀婚のひと悪びれず手洗いへ行くさえこだま自働ドア一明治百年自働ドア一に迎えられ故障と知らず自働ドアのあはらしさ足もが一寸まごつて自働ドア一まねかざる客にもあいた自働ドア一ためらつてる恋に自働ドア一閉まる椅子蹴つて立つたに自働ドア一静か自働ドアひとりで来たを知っている自働ドア一冷氣がドンとぶつかり自働ドアガチャンと閉めたい音がするはいる気がないのに自働ドアが開き自働ドア一気味悪そうにすりぬける客のない自働ドア一の午後の雨自働ドア一私は夜の蝶である

席題「食券」 松川杜的選

カーテンの風に食券二つ飛び食券をあいそのない娘が来てもぎり食券をよぶんに買つてむだを食いカレーなら早いですよと券を出し食券を買つても注文又聞かれ時価とある品へ食券まようてる

効きすぎたかと毒舌は頤を撫で
言い負けてやれば毒舌うまが合い

カナリヤの声へゆりかごの良い寝る
無駄話ベビーがくしやみして止まり
ベビー抱き職場へご無沙汰託^びけに寄り
ベビー成長僕も成長してるはず
ベビー泣いてパパの晩酌放つとかれ
誓

六童子
弓彦
白溪子
古方
二

TEL (761) 三四五二一四
夜間 (762) 四四〇八

ベビーベッド子守歌など聞いたらず
双手は天にベビーも主張を曲げず
ベビー用品ベビーのよう仕にあらず
ベビー服二三度着せたまま育ち
抱き癖を土産に残し母は去に
ベビーのよき声でレコードヒット

兼題「朝」

阿万万の選

カナリヤののどかな声に朝が明け
職人の朝酒を飲むお朔日
売れっ子のタレント朝の間を眠り
せせらぎにねむたい朝をおこされる
倒産の工場に静かな朝が明け
牛乳瓶の音にベッドの朝を起き
工事場の朝へ太陽があびせかけ
納豆売り下町に尚江戸の朝
豆腐屋の早起き湯気の立つおから
徒然に休日の朝爪を切る
朝食をぬいた女のコンパクト
夜行列車ホームへ朝の深呼吸
花街の朝は疲れた色で明け
おくれ毛を今朝の鏡にみつめられ
朝今日も生きる仕事順を決め
五分程かけ値を言うてゆり起し
妥協した朝へ小雨が降り残り
花の種もろうて朝をうれしがり
橋筋の朝拾い屋の動くところ
朝が来た嵐の跡の釜が崎
恢復期頹杖のまま朝の味
まだ寝てる街へ地下タビ朝を出る
もう朝やなあーと勝ってる方が言い

貞論 山 愛論 金三 庸佑 金三 芳三 季賛 章雅 齊花 軒太楼 継之助 柳太 喜々庵 生々庵 多仙 多久志 芙巳代 きさ子 与呂志 葉子 生々庵 一三夫 柳太

朝寝する母が不安な子の瞳
まぶしくて朝の新婦の眼のやりば
釣りに発つ朝気せわしい箸を置き
山小屋の朝頂上が其処にあり
湯の宿で習うた唄で朝を発つ
齒磨粉の朝の保護色とも思ふ
雪融ける曲を聞いてる北の朝
堀江新町昔と違う朝が明け
共稼ぎ同じ権利で朝を出る
ほつとして夜警は朝の水を打ち
下駄の音宗エ門町の朝を掃き
ストまでは予定になかった旅の朝
タミナル魚の臭いで朝が明け
宿の朝いつ迷うたかよその下駄
こればちの朝商いを大事がり
煙草に荒れた舌へ徹夜の朝の水

兼題「飛ぶ」

清水白柳選

水溜りミニスカートで軽くとび
なめくじをはだして踏んで飛び上り
秒読みへ勇士の妻は目をそむり
飛んで帰って死目に会わず
デマ飛んでどうやらスターらしく
飛ぶがなと止めたら暑い扇風機
本番になって人形飛び降りる
飛ぶように売れるは曲げた記事は
二階級飛んで殉職惜しまれる
シャボン玉友と別れる風に乗る
たん造工場とび散る火花へ生活の詩
怒声飛ぶ中貫禄の歩を運ぶ
座ぶとんが飛ぶ逆転劇で面白し

千舟 文秋 金三 小松園 静馬 古方 柳太 野迷路 多志 滋雀 六童子 柳宏子 杜的

飛びこんだ胸に女として生きる
両手高く飛ぶ恰好をしてみせる
飛んで来た蟬は鳴けない性を持ち
飛びこんでから横着な策をたて
飛び出した故郷へは風の便りだけ
祝優勝故郷へ向けて飛ばす鳩
子づめのスピードが早い親づめ
清水の舞台からとは第三者
空はもう飛べない鶏になっている
ヒューズ飛んだ電氣屋呼び出さ
飛ぶ蝶に冬耐えて来た影はなし
答弁を聞くとうしない野次が飛び
外野席二つに割れたホームラン
火の粉星見付けた声がはずんでる
人工衛星見付けた声がはずんでる
交通地獄空が飛べたらなと思ふ
飛ぶように売れるが人手集まらず
飛び降りたところに刑事が張っていた
又ふえた車見下しづばめ飛ぶ
要求は入れられたけど首が飛び
電報で飛んで来たのが一と七日
風通し良すぎて何も置けが飛び
合格へ僕の番号だけが飛び
もう飛べぬトンボとなつて放たれる
バツあわててバツの距離を飛ぶ
飛ぶことを忘れておうむ嘴を磨ぐ
飛んで来た子の一大事聞いてやり
鳴かず飛ばず年輪だけの部長なり
不始末のとは飛はしておく甲辞
ふところへ飛び込んでくる子の頭
飛ぶことを覚えた孫に疲れ果て

花梢 水客 芙巳代 生々庵 滋雀 万雀 きさ子 多志 舟遊 白溪子 季賛 愛論 静波 柳宏子 かつみ 一舟 多志 頂留子 小松園 梅里 きさ子 どんたく 静馬 舟遊 水客 芙巳代 好郎 好郎 水客 白柳

老地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会（奈良吟行） 金井文秋報

枝振りは絵になる杉へ鹿が来ず
風薫るフツ図書館を通り過ぎ
風薫る雨戸を開けてみて独り
休憩所早速おしめかえはじめ
ビニールのような角して春の鹿
薫風にセルさわやかな肌ざわり
休憩所の前で二人の手がはなれ
クラクション位いでのお奈良の鹿
隣りまで櫓を立てた休憩所
塔影が池の波紋の日のび縮み
眼を病んで風薫る日の窓を見ず
鳥居から神の使いに見下ろされ
駆けること忘れ雌鹿の横すわり
団参の鳥居を出ると崩れかけ
お二人鹿三匹の小半時
お湯呑の数で席料計られる
風薫る女の素足うつくしく
池よせのように学生集められ
鹿の鯉のいぬびり初夏の風薫る
腰掛石のわねは知らず座て見
あしんど先ず腰かける休憩所
鹿よせも何処ふく風の満腹さ

柳彦志 弓客 水痴 笑方 静江 吸園 小松 梅里 滋柳 金三 笑介 凡郎 玩柳 竹莊 季秋 文子 双案

ならのしかりつばなつのはほい
伊勢参り記念に鳥居も入れて撮り
鳥居から見えない店で鳥居前
休憩所ここにも鹿がつきまとい
休憩所高い山程たこう売り
觀光の列を正して大鳥居
風薫るビールのうまい頃となり

玉造川柳会（大阪市） 西出一栄報

出かしたぞ五月に織たててやる
夢でなし女一人で逢いに来る
当確へ万才の声自然に
物言わぬ父が咽つた披露宴
売店はラッシュのあとの水を撒き
遅刻した人を横目で迎えいれ
万引を刑事横目で引つとらえ
ちよつとした横目が妻の気にか
今日習った結んで開いて祖母に
桃太郎より怪獣の幼稚園
幼稚園へゆつとスクールバス帰る
一年生馴れさすだけに一学期
小卒と云うハンディがつきまとい
級長の親は欠かさぬ参観日
小学校母があらわてた娘の生理
小学校親がライバル決めて子守唄
魂を入れかえて来いと旅に出し
魂まで売れる君ではない客だ
喋々と駄弁り魂のすき間
肉体と魂個々に陽炎う日
人魂も春の夜風に浮かれ出し

岡鉄川柳句会（藤原秋月報）

肩を貸すほど上役が酔うてくれ
上役も人間お粗末なのがおあり
上役の出張事務所を春にする

洋子 あいき 玲人 遊仙 白風 喜仙 一山 貞舟 照柳 白柳 寿美司 双案 季贊 井平 古尼 文方 滋雀 金三 美房 静歩 章雅 凡九郎 六竜 静馬

上役が叱られ今度は俺の番
上役に挨拶嫌いなのが一人
上役が先ずとつときの芸を出し
孫のある身で上役に叱られる
居眠りの背に上役の目が光り
上役が交つて方針また交わり
上役をさかになして居るコッパ酒
上役の誠意にふれて歩を励み
上役に反抗したい気をおさえ
上役に貸したが返そうとも言わず
上役がお酌に廻る慰労会
出来すぎた人材中途で芽をつまれ

南海電鉄川柳会（大阪市） 辻圭水報

手荷物は固く握つて家出の娘
手荷物に通路をふさぐ帰省客
手荷物にならんが伯母金一封
手荷物をあけたらお骨はいつた
手荷物をあけずAコースへ発車
手荷物はベタベタ旅館レベ貼
手荷物は集団就職とわかるかさ
手荷物は集団就職とわかるかさ
手荷物になるがと柿の枝も呉れ
手荷物の重さが足へまとい付き

川柳世面多留（小野田市）

危機をぬけるたびに神経太うなり
危太さを丸く輪にふく刑事室
停年の俺にまだあふる太腕
落選の事務所に必勝字が太腕
図太さに借金取りも寄り切られ
ジャンパーの花を咲かせスキー場
ジャンパーの皮ジャンパー泣く獲物
マネキンの着たジャンパーが料理
ジャンパーに下駄をパチンコに入れ
銀輪を踏むジャンパーの列が抜け

秋加恵 月峰 田九郎 訓平 三平 文照 哲郎 幽谷 柳五 乃 圭水 八郎 和郎 句念 貴山 季賛 宏三 金三 枯泉 醉生 新羊 千枝 光次 衛子 素道 美子

職安の列ジャンパーが疲れてる
ワンマンの切り札責任取れと言
責任の椅子に責任待ってと言
責任を持って楽しんで庭掃除
父親の責任離婚後も続き
口ほどに責任感じやいな顔
責任を本に負わした味加減
責任を取った痛手を酒に逃
留守番をホッカリホッカリ陽
初孫で急に陽気になった家
朝風へ出船陽気な歌になり
通学路帰る唱歌の子の陽気
快復期春の陽気へ背伸びする

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

川の字に寝る幸福のつづく日々
子沢山幸福そうに見えただけ
母子寮で小さな幸福かみしめて
幸福はまだ叱られる親がいる
湯殿から鼻唄もれる春の夜
セールの靴履かえる日曜日
押売とまちがえらセールスマン
セールの初歩先輩を頼って来

富柳会句会

(富田林市) 阿部柳太報

共稼ぎ今日日曜と云う朝寝
春休み子らの朝寝につり込まれ
はしと酒の梅が残っている朝寝
野仏へ両手合せてした門出
両の手に孫をだいてる老いの春
釣り落した話両手の巾が伸び
親馬鹿の両手に重いうちや箱
ボケッとして両手のボーズせかさ
両手ついて女うるさい御挨拶

明幸 涼昌 花仙 和男 利海 詩痴 いさ夢 素休 六空 夏生 没食子 竹蔵 良夫 草右 竹志 よしを 栄一郎 美郎 好郎 笑遊 柳太 六竜 葉子 吸江

豪勢な女ばかりの花の下
満開を素通りすると一人旅
縫いたてをせめて名残りのおそ
満開はさあ見てくれと云う姿
散りそめてまだ五分咲きの花だ
進学に夢中夫婦にできた距離
赤電話うしろの列に気がつかず
正体を見せぬ横顔美しい
取込みと判ったときは逃げたあと

○

非常出口たしかめて寝るホテル
なまぬいジュースの後を母が飲み
落選の方へ集金先に来る
誰を待つやら寄席の出口にいい女
信心はどんな仕打も噛みこなし
トンネルの出口を点として見つけ
迷い児も押しながされてきた出口
うららかさ昨日の仕打も忘れかけ

高知川柳社(高知市)

川竹松風報

天気図へ吾が故郷も同じ雨
留守番の運がよかった花の雨
小雨決行伝言板の友を待ち
クレパスでかく母さんの目が笑
着物などいらぬと母を困らす娘
忍耐の強さを母の血に継がれ
母のほかに恋がきく父でよし
シグナルの青を待つのも楽と二人
愚筆の誠意へ返事すぐにくれ
試歩の杖気がうまい庭木立
子を叱る父の短気を母かばい
合格の水打ち隣の扉を越え
面接に片親選って赤チエック
坂道を転べば人は笑うのみ

美代 吉太郎 東雲楼 雄声 花里 柳志 静馬 白太 柳江 吸雲 東雲楼 美一郎 美梢 花房 美代 是江 昌雄 文子 舞子 吞破 竹洋 松風 天樹 勝子 蟠蛇 伊津志 香芳

第10回記念近県川柳大会

学生句集発刊記念

日時 昭和四十二年九月三日(日)

場所 受付八時、出句締切一時、閉会四時
興線竹原駅前、三井会館、徒歩三分
中、四国海上一時間二十分。フェリ
ー発着港より車で三分。

兼題 若手・押ピン・白・すい・喫煙
室・無口・零・ボス・歯車・各二句
席題 当日一題、天位に毎日新聞社楮贈呈
会費 三百円。句集、発表誌、昼食費共。
投句料 二百円。句集、発表誌贈呈。
投句先 広島県竹原市竹原町田中 山内静水

泣けなくな春の土佐路の銀メダル

川柳あしなみ句会 (姫路市) 岳詩報

新しいハンカチ胸に退院す
おしゃべりの中に私の夢もあり
渡船料旅の心がまだ残る
あなともう齢よと妻にいたわられ
対立の中へ女の酌が来る
地下工事土もいっぶくするゆとり
振り出しに戻り故郷の土を踏む
故郷の土の香包む荷をほどく
今つけた煙草へ浮きか動いたり
植木鉢土も一緒に買うて来る
安来節のリズムにこころ浮く来る
対立が出来て心にゆとりもち
一坪の土も団地と云う手入れ

大鉄川柳会 辻白溪子報

上品な言葉で隙を搜り合う

永断

青春の汗は真珠のように浮き
青春の意気は白髪も同意する
丹精を費められ花と写つされる
盃を置いて暫く庭を褒め
名づの貯金をはめて足してやり
名園の椿散らした菜種梅雨
陽の風へ石はオーケストラのごと
雑草とみぶ菜仲よく春になり
応仁の戦禍が残る手洗鉢
石庭に住みつきと負けも石の色
八重椿山吹の黄に負けじとす
一對の石仏どちらも顔が缺け
ウイロー社句会(ハワイ) 快夢起報

尚山 宗門 奮鳥 飛鳥 美穂 求賛 季的 杜客 万水 白溪 蒼蛇 内海 石海

文化には遠く長生きています
世の変わり金鶏に替わる文化賞
名山も文化の波に切り取られ
殺し屋もあたり屋も居る文化の世
文化住宅ラブレター燃す火鉢なし
引退はしたけど周囲が休ませず
引退はしてもまだまだ任さぬ気
引退の早起き妻に邪魔がられ
引退へ余生のプランまた案し
抱いてはた夢引退と共に失せ
引退をしたから途端に気が返る
引退をしたから急に若返る
引退の社長に顧問の役が待ち
引退をしてから人へ遠く住み
引退へ物売り勧誘よりつかず
惜しげない賛辞引退肌で聞き

麗花 紅茶 紅里 浅太 紅溪 紅坊 失名 拜山 曉舟 泉水 カス子 柳葉 雪女 浮夢 草

雅号ぶつちやげばなし (32)

か ず え



西 出 一 栄

に し で

片手間に独りで俳句や南画を楽しむ父の
長女に生まれました。始めに生まれた子は先
きに栄えるのが必定と一番に栄える意味から一栄と
名づけたそうです。白柳先生の手ほどきをうけてぼ
つばつ五七五が並べられるようになった時皆さんそ
ろそろ号をつけたらとのことでしたが、私に号をつ
けたら号が泣きますやろと本名そのまま今日に至り
ました。今になって雅号が欲しいなと思う時もあり
ますが、もう手遅れです。でも父がつけてくれた名
を雅号同様に愛用して居りますことを今は亡き父も
喜んでいてくれることと思ひ一生このままで行こう
と思つて居ります。

主婦 六十三歳

どんぐり川柳会(大阪府) 川村好郎報
鼠肥やしして食堂儲けとり
貧しくも鼠わが家を見捨てない
ほろ酔いに水掛けられる法善寺
ほろ酔うてひとり住いの味気なさ
うかつにも鼠尻尾を忘れてさ
火の車知つてくれば鼠寄りつかず
引越したくれば鼠の置土産
ちらり見たうちのねずみの肥り
歯の悪い鼠も居らずよくかじり
ほろ酔いに手枕があらうかわあり
ほろ酔いで満足させた妻の酌
グデグデを乗せてほろ酔運転し
鼠走れる程もなしわがキッチン
すさまじい天井鼠の恋らしい
場末の灯消えて鼠の食さがし
夫には強いが鼠には眼をまわし
金を産むツボジョージョという鼠
野鼠の習性にもなる命の灯
ほろ酔いがいつかはしこの千鳥足
就職の祝母までほろ酔いぬ
ほろ酔いに音痴の歌を聞かされる
ほろ酔いに人生の味かみしめる
ほろ酔いで一寸からんでみたい妻
スリッパが乱れて医者のはや
新婚のセータースリッパもなべア
ほろ酔いに子供のおもちゃ面白し
左官屋へ別に頼んだ鼠穴
そう云えば鼠天井にもう居らず
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報
病む身には強く生きよと母の声
母があり夢に止めとく冬の山
ささやきが議決に効いた多数決

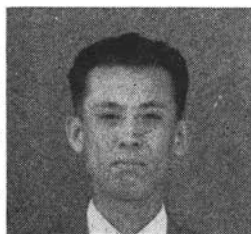
生鬼 遊長 吸江 泉吉 静波 双春 喜好 東天 誠二 雄路 八郎 高嶺 信坊 茶玄 幽水 比呂 比呂 電マ 雪貞 啓吉 孝々 奈々 薫風 好郎 白柳 幽安 玄秀

雅号ぶつちやけばなし

(33)

昭和二十二年の秋、市役所職員により「川柳講座」の場において、はじめて川柳を知りました。

こ
ろ
じ



小林 孤呂 二

こ
ば
や
し

それからまもなく、雅号をはじめ毛兎一（もといち）と本名を振っていましたが、句会の場においてもあまりパットしないので、先輩の勝谷山川児氏に相談を持ちかけたところ、それではと、当時川柳より退いていた父（孤呂一）の二代目として孤呂二（ころじ）にしてはと名付て頂きました。爾来、先輩、同輩から孤呂さん、孤呂さんと、日常のあいさつに、又句会の場に親しく呼んで頂いています。

公務員 四十歳

上役のミスをささやく更衣室母だけに打明けたくなる片想い初恋の彼女の顔に母の影母のくせ可愛くまねておまごと還暦の母へ気まよく部屋を増しドイツ語でささやく医者のにっこりTVマンガ教育ママもついたらテストよりママの顔色気にする子供より母が気になる成績表ふるとの母に送るカーネーションあきらめていてもやっぱりほい母エンヤコラ黒くたくましい母の腕何げなく母だけに知らず好きな人月一度帰る我への母の愛リズムカル母の庖丁がのぞかせる子に甘く父にはきつい母だったひな壇を囲んでも母は人気者

秋花水 昭美水 輝成水 茶坊水 重文夫 武夫 武夫 岳人 都人 聖代天 比呂路 浩平 与一 清笑 秀鬼

自己反省しろと下からささやかれ春の丘ささやくように頬をなでささやきが笑いに変るつまみ喰い草に臥し雲にささやく日の若さ若夫婦甘くささやく日々楽し独り寝にささやかける風の音アパートの朝目ささやく活気づきささやけばみなまで言うに値しきささやけばよしアパートの日曜日つじつまを叱った母がつてくれ

正成一子 啓吉彦 信次 高嶺 秋春 武女 梅里 好郎 立兒 瓢太 泉睦 星斗

あきれたと顔見てるのにまだ喋り万病に効能書が効きすぎる万金を積んでも聞けぬ意地がある万感がこもる握手の痛いこと見つけたしめて万国博まではまあ待てとまず老眼鏡とりあげる連休がすめば疲れて又休み許す気は熟って握り返した手外泊が許され退院の夢を見る連休の入院患者もおちつけず連休に他人のプランもたててやり連休のプランも組まず夢を見る女連れならと一泊許す母

緑果雨 春児 鉄賛 茶々坊 誓中 作々 凡郎 漫多 鉄舟 天樹 みのる 弧舟 三十 笑四 継之助 千尋 和子

告

社

川柳塔の優秀句へ「路郎賞」 近作柳樽の優秀句へ「川柳塔賞」

「路郎賞」の選考委員は第一回とおなじように中島生々庵、北川春巢、西尾榮、菊沢小松園、川村好郎、松江梅里、若本多久志、清水白柳諸氏。「川柳塔賞」の選考委員は清水白柳、市場没食子、橋高薫風、戸田古方、正本水客、川村好郎、菊沢小松園諸氏に内定。

昨年十月号から本年九月号発表の川柳塔同人作品と、近作柳樽の作品から各選考委員がベスト一〇をえらんで持ち寄り、その栄光の一句を九月三日の常任理事会で決定、十月号で発表。「路郎賞」に桶と賞状「川柳塔賞」にはカップと賞状。なお句と雅号を記念品にきざんで贈呈。(川柳塔賞は本社同人以外の作品に限る)

川柳塔社

九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選
近作柳樽(10句) 北川春巢 選
課題吟(各題5句以内)

「波紋」 都倉求女 選
「リーダー」 浜野奇童 選
「方角」 西森花村 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。
文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表(8月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選
近作柳樽(10句) 北川春巢 選
課題吟(各題5句以内)

「電話帳」 横山一声 選
「司会」 野村味平 選
「ペット」 石川侃流洞 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください

川柳塔社常任理事会

六月三日六時から本社で常任理事会。
「川柳塔賞」の選考委員は新しく没食子、水客、古方、薫風諸氏というカラーの変わった人たちが参加することに内定した。本来なら地方の役員諸氏にも選考委員として参加していたが、都合など時間的にムリがあり、在阪役員にかぎられたことをおことわり申しあげておく。

路郎賞の部の委員長は中島生々庵氏、川柳塔賞の部は清水白柳氏が委員長にきまつた。各選考委員は九月三日に候補句提出厳守。出席—清水白柳、若本多久志、中島生々庵、松江梅里、菊沢小松園、不二田一三夫諸氏。

茶
グリル・ラウンジ
パーティ・ラウンジ
展示会場



茶・グリル・ラウンジ
御門
GYOMON
心齋橋大丸・そごう東入る
TEL 271-6684

・2DK・

★七月は大阪のまつり月である。一日の愛染祭を皮切りに、日本三大まつりの天神祭をはさんで、三十一日の住吉大社南祭まで実に大小八十七社のまつりが商都の夏を彩るのである。かつてはこの七月に川雫川柳まつりがあった。

★七月は大阪のまつり月である。一日の愛染祭を皮切りに、日本三大まつりの天神祭をはさんで、三十一日の住吉大社南祭まで実に大小八十七社のまつりが商都の夏を彩るのである。かつてはこの七月に川雫川柳まつりがあった。

★八月号は「川柳と戦争」の特集。9月号は柳翁三の月でもあるので、故豆秋氏の句集「ふるさと」を特集。10月号は「路郎賞」と、本年から新しく設けた「川柳路賞」の発表。11月号は例年のように、「はたらくうた」を特集。と、企画をしている。ご期待ください。

★若木多
久志氏の
句集「老
イの坂」

★川村好郎氏と松江梅里氏の兄弟句集も今秋あたり発行されるようである。

★みんなが夏バテしているスキに、一歩でも先きんじようと、がむしやりにガンばつたものだが、だんだんダメになつてきた。人間、からだを大事にするようになつたらダメですね。

(不二田一三夫)

Toray

EASY CARE / 手のかからないせんい
東レニクロン
レイヨンコート

東洋レーヨン株式会社



GOLDEN
O.S.K

の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー



定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料共)

一年分 千四百四十円 (送料共)

昭和四十二年六月二十五日印刷
昭和四十二年七月一日発行

大阪市南区緑ヶ丘二丁目二番地

全編編集 中島 隆太郎

印刷 大陽印刷株式会社

大阪市南区緑ヶ丘二丁目二番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七二二九八五番
郵政口座大阪・三三三二六八番

今年も避暑は

高野山

特急「新こうや」号 毎日2往復
なんば ①8時30分発 ②13時30分発
座席指定券1週間前から発売…170円
全車完全冷房完備スナックバーつき

— 宿泊クーポン発売中 —
〈1泊2食と往復運賃つき〉2,000円

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038
(779) 8661 (632) 0188

南海電車



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー